

小・中・高・大を連携し、すべての英語教育の"今"を知る。

英語情報

2016
夏号
SUMMER

[特集] 言語活動の充実とアクティブ・ラーニング

岐阜県 多治見市立笠原小学校 勝部 佳純 先生



山口県 山口市立大庭中学校 中沢 純子 先生



宮城県石巻高等学校 武田 誠 先生



英検

公益財団法人 日本英語検定協会



慶応義塾大学 國領 二郎 常任理事(国際担当)



小・中・高・大をつなぐ『英語情報』をお届けします！

現行の学習指導要領により、小・中・高等学校の英語教育が「コミュニケーション」を軸として一本化したことを受け、小・中・高の接続がこれまで以上に重視されてきています。また、高大接続改革も進行しており、大学入試の改革に注目も集まっています。そこで『英語情報』においても、各校種の先生方のお役に立つような情報をさらに充実させるため、2016 年度より、小学校の先生方向けの情報紙『The Sensei Times』と統合し、英語教育に携わる全ての皆様のために、小・中・高・大をつなぐ総合情報誌となりました。さらなる拡充を図る『英語情報』にどうぞご期待ください。

『英語情報』について

- ◎発行回数は年4回。
春号：4月発行、夏号：7月発行、秋号：10月発行、冬号：1月発行の季刊誌となりました。
- ◎内容を拡充。
56 ページの総合情報誌として、内容を拡充。授業改善に役立つ情報が満載です。
- ◎英語教育に携わる皆様のための総合情報誌に
次期学習指導要領も見据え、小学校から大学までの英語教育改革に関する情報や高大接続改革の最新動向をお届けします。



Information

『英語情報』専用アプリができました！ (無料) (iOS/Android対応)

スマートフォン&タブレットアプリで **AR** マークのついた画像をかざすと、授業に役立つさまざまな動画を見ることができます。

今号の動画は、発行日より3カ月間（予定）ご覧いただけます。

STEP 1 アプリをダウンロード

スマートフォンかタブレットを用意して、AppStore / Google Play で「**英語情報 AR**」と検索し、ダウンロードします。

英語情報 AR 検索

STEP 2 画像をスキャン

「英語情報 AR」を起動し、**AR** マークのついた写真が枠内に収まるようにスキャンしてください。

STEP 3 動画を見る

「スキャン完了」と表示されると、動画が始まります。「スキャン完了」と表示された動画は「履歴」画面より動画を選択すれば誌面から離れても動画をご覧いただけます。

※ iPhone/iPad ➡ iOS 7.0 以上、Android ➡ ver. 4.0 以上。
Android 版は一部対応していない端末がございます。
インストール画面の動作確認端末をご確認ください。

※ カメラのピントが合わなかったり、光が反射したりすると、読み込みができない場合があります。
※ 読み込まない時は、カメラ位置を少し上下させて読み込み距離を調整してください。
※ 読み取りに時間がかかる場合はアプリを再起動し、再スキャンをしてください。
※ 動画の再生にはネットワーク環境が必要です。Wi-Fi、またはLTE 環境を推奨しています。

英語情報 CONTENTS



- 02 **AR** 緊急企画
がんばろう熊本! がんばろう大分!
心をつなぐメッセージ
- 04 最新情報
04 NEWS & TOPICS
- 06 授業改善
06 特集
言語活動の充実と
アクティブ・ラーニング
監修：関西大学 教授 竹内 理
- 10 特集事例 CLASS REPORT
(高等学校編)
AR 生徒が主体的に言語活動に取り組む授業で
思考力・判断力・表現力を養う
宮城県石巻高等学校 教諭 武田 誠
(中学校編)
AR 短時間で区切った活動を展開し
生徒が楽しいと思える瞬間をつくる
山口県 山口市立大殿中学校 教諭 中沢 純子
(小学校編)
AR 言語活動を通じて育まれる
伝えようとする意欲と相手を思う気持ち
岐阜県 多治見市立笠原小学校 教諭 勝部 佳純
- 16 (連載) YUKI の使える CLASSROOM ENGLISH!!! 【第2回】
ハワイ東海インターナショナルカレッジ 准教授 大木 優喜子
- AR** 17 (連載) 安河内 哲也先生が聞く【第8回】
明日から使える! 英語で授業 7つの鉄則
新潟県立新発田高等学校 教諭 根立 望
- 22 (連載) 大学入試から変わる日本の英語教育【第2回】
学力の3要素を育むアクティブ・ラーニング
上智大学 言語教育研究センター長 特別招聘教授 吉田 研作
- 24 (連載) 次期学習指導要領に向けて
(高等学校編)【第2回】
4技能統合型の“循環学習”のススメ
上智大学 外国語学部 教授 和泉 伸一
(中学校編)【第2回】
「授業は英語で行うことを基本とする」への取り組み
文法指導に「使う」の視点を取り入れるために
文教大学 国際学部・同大学大学院 国際学研究科 教授 阿野 幸一
(小学校編)【第2回】
コミュニケーション能力の
「素地」「基礎」を養うための授業のつくり方
琉球大学 教育学部 教授 大城 賢
- 30 大学入試改革
30 TEAP Hot News!
上智大学が2016年10月よりTEAP CBTを採用
TEAP 活用事例 第8回：明治大学

- 32 留学
32 (連載) 海外進学【第4回】
生徒自らが才能を開花させ、自らの手で切り開く未来
開成学園 校長 柳沢 幸雄
- 34 日本人留学生の6人に1人が「英検で留学」!!
～ハワイ カピオラニ・コミュニティカレッジの魅力とは?～
- 36 (News!) ハワイで「英検」が受験できるようになりました!
～ホノルル公開会場新設のお知らせ～
- 37 わたしのオススメ本
- 38 国際化の取り組み
38 Super Global High School【第8回】
全生徒推進型でSGH 研究を行い
グローバルリーダーを育てる
早稲田大学高等学院
- 40 Top Global University【第8回】
世界中の課題を解決するために
研究・教育の両面で貢献できる大学へ
慶應義塾大学 常任理事(国際担当) 國領 二郎
- 42 指導のヒント
42 (連載) 思考力・判断力・表現力を育む
ライティング活動のために【第2回】
清泉女子大学 文学部 英語英文学科 教授 大井 恭子
- 43 (連載) 柴原智幸先生のプレゼンテーション講座【第2回】
神田外国大学 外国語学部 英米語学科 専任講師 柴原 智幸
- AR** 44 (連載) MASUMI 先生の
夢中になれる英語 Game&Activity【第2回】
英語芸術学校MARBLES 主宰 小口 真澄
- 46 Pick Up! 英語教育
46 グローバル人材育成を見据えて【第7回】
わが町の英語教育事情
徳島県立総合教育センター 岩崎 洋 所長×橋本 隆 次長
学校経営支援課、教職員研修課のみなさん
- 50 (特別記事) 帝京ロンドン学園高等部・関根影子先生に聞く
イギリスの日本人学校から
日本の英語教育への提言
- 52 SPECIAL REPORT
平成 27 年度 実用英語技能検定
成績優秀者・優秀団体表彰式を開催
- 54 教員研修
54 2015 年度 英検 英語教員海外研修
帰国後の取り組み報告
●中学校英語教員研修 米国 モンタナ州立大学
京都府 京都市立加茂川中学校 (研修当時：京都市立修学院中学校)
教諭 並木 亮子
●高等学校英語教員研修 英国 ケンブリッジ大学
宮城県泉高等学校 教諭 渡邊 崇

がんばろう、熊本！

2016年4月14日（前震）、そして16日（本震）の2日にわたり、熊本県熊本地方を震源とする最大震度7の地震が観測され、熊本県内および大分県内で大きな被害が発生しました。現地では今なお、避難生活を余儀なくされ、地震への不安を拭い去ることができない状況にあります。少しずつ生活は元に戻り、休校していた幼・小・中・高等学校の授業は再開しています（5月31日現在）。全国の先生方から、『英語情報』編集部へ寄せられた、熊本・大分の先生方や子供たちへの応援メッセージをお届けします。

被災された皆さまのご苦勞、ご心痛をお察し申し上げます。このような非常時における皆さま方の規律ある振る舞いに接して、世界は驚嘆していると耳にします。同時に外国からのボランティアの方々に對して、我々も頭が下がる思いです。人との絆は辛いときほど強く感じますが、どんなときにも人々の心を結ぶコミュニケーションの重要性に改めて気付かされました。微力ながら教育活動に取り組むことで、復興支援となればと願っております。



千葉県立長生高校
百瀬 美帆 先生

熊本・大分地震で被災されている方々に心よりお見舞い申し上げます。
報道を通して、皆さまの痛みとともに強さを教えられています。避難所のお世話をしていらっしゃる先生方や児童生徒の皆さま。非常時にほかの人のために優先し実践される温かさと強さは、私たちに希望を与えてくれています。
少しずつ通常のお仕事や学業に戻られているのでしょうか。不安と不自由な日々がまだしばらく続くとのこと、どうぞご自愛ください。遠い地からではありますが、熊本・大分の方々の事を思わない日はありません。涙は、明日の虹の糧となることを信じ祈っています。Peace be with you.

高知県 大豊町立おおとよ小学校
濱田 奈美 先生



「先生、宮城へ帰ります」。東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）から京都へ避難していた児童が、この春宮城へと戻りました。京都へ来て丸3年、どれ程長い時間が経ち、こちらでの生活にも慣れ、新しい友達ができたとしても、それでも帰りたい場所…それこそが“故郷”なのだと思います。

このたびの熊本・大分地震で被災された方々の恐怖やご苦勞を思うと、励ましの言葉さえ簡単には口にすることはできません。阿蘇大橋や熊本城まで被害を受け、今は辛くとも、皆さんの愛する故郷が復興する日が必ず来ると信じています。一日も早くその日が来ることを、心から願っています。

京都府 京都市立大宅小学校
三田村 有香 先生



このたびの地震により亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆さま、そのご家族の方々に、心よりお見舞い申し上げます。

学校に通う子供たち、先生たちをはじめ、地域の皆さまがまた笑顔で過ごせる日が来るよう、一日も早い復旧復興をお祈り申し上げます。

No rain stays forever. Wherever we are, our hearts are together. Our thoughts and prayers are always with all of you in Kumamoto and Oita.

三重県立宇治山田商業高等学校
児玉 靖明 先生



がんばろう、大分！

心をつなぐ
メッセージ

今回の震災において、熊本県、大分県等、九州の各地域で被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。公教育、民間教育を問わず、先生方もご苦勞されていることと推察いたします。生徒たちも将来の進路や今後の学習において、大きく悩んでいることだと思います。自身が九州出身であるため、同郷の皆さまが大変な苦勞をされていることに心が痛みます。一刻も早い復興を願います。

日本という国は、今後も台風や地震等の自然災害と永遠に向き合っていかなければなりません。そして、災害が起こった時には、医療、経済、防災、福祉、建設など、あらゆる分野の専門家が協力して対処しなければなりません。

私たち、教える立場にある人間も、学ぶ立場にいる生徒たちも、決して災害に対して無力ではないと思います。教育

こそが、未来の日本を災害から守っていくために大きな責任を担っていると思うのです。

大変な状況ではありますが、今、私たちにできるのは、生徒たち一人一人が将来の目標に向かって学習することこそが、未来の災害に対する最大の備えであるということを伝え、生徒たちを前向きな気持ちにしてあげることだと思います。また、私たちも自身の教授技術の研鑽に励み、それを共有し、全体のレベルを上げる努力に励んでいくことが重要だと思います。

教育の力を信じて、ともに前に歩んでいきましょう。未来の日本を守るために。

安河内 哲也 先生



2011年3月11日の東日本大震災にて甚大な被害を受けた、宮城県石巻市。

本誌CLASS REPORTの取材で訪れる直前に、このたびの熊本地震が起きました。そこで、震災から5年が経った被災地の現状と、被災地から熊本・大分へのメッセージを宮城県石巻高等学校の武田誠先生に寄せていただきました。また、生徒たちからのメッセージをAR動画にてお届けします。

2011年3月11日の記憶は、生徒たちの心から消え去ることはないでしょう。当時の私は高校2年生の担任をしていました。いつもは静かで穏やかな海が、町が、あの日はまったく違う景色となり、校舎の窓から見える住宅地も火の海に巻き込まれていくのを生徒たちと一緒に目にしました。いつ保護者が迎えに来るのかも分からない、保護者の安否さえも分からない。そんな不安な状況のなか、私たち教員にできることは、ただ生徒たちの保護者が迎えに来るのを待ち続け、ただそばに寄り添うだけでした。

今回、熊本・大分で起きた地震のことを報道で目にするたびに思ったのは、まず、「温かい物を食べてもらいたい」ということでした。私もあの当時、震災から1週間が経って、仙台の実家へ帰ったとき、親が作ってくれたうどんの温かさ、それはもし

かしたら家族の温かさなのかもしれません。そんな“温かさ”に触れて、止めどなく涙が流れたものです。

私からは、皆さんに「がんばってください!」という言葉が掛けられません。私もあのときを思うと、何をしたらよいのかが分かりませんでしたから…。でも、いつか必ず、前を向いて歩き出すときが来ます。私も、そうでした。ですから、今は数カ月先のことなど考えず、目の前のことを見つめて、今、隣にいる人と手を取り合って支え合っていっていただけたらと思います。

震災から5年が経った今でも、石巻の町は完全に復興したとはいえません。しかし、当時私が受け持った生徒たちが、ちょうど大学を卒業して社会人となり、相当数が町に帰ってきました。みんな、家族や地域のために自分ががんばろう、自分たちが生まれ育つ

た町の仕事を自分たちが受け継いでいこう、という気持ちを強くしているようです。震災のことは風化させたくはありませんし、生徒たちの記憶から消えることもないでしょう。でも、震災を通じて広がった国内外の高校生などとの交流の輪があり、生徒たちはその経験から人間的に大きく成長しています。私たちはその輪を大切に、さらに交流を広げ、ともに手を携えていきたいと思います。

宮城県石巻高等学校 武田 誠 先生

石巻高等学校の生徒たちからのメッセージ



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。
(アプリの詳細は表紙の裏面へ)

NEWS & TOPICS

英語学習指導などに役立つ最新情報をお届けします

INFORMATION

全ての教員の皆様へ 「英検 検定料助成制度」 のご案内

英検協会は、文部科学省の『英語力向上のための5つの提言』に関する取り組みを全面的に支援し、全ての教員の方々を対象に英検を教員特別検定料にて提供いたします。この機会にぜひ、英検を有効にご活用ください。

■助成の対象となる試験

実用英語技能検定（英検）

■対象となる級および教員特別検定料

級	教員特別検定料	定価
1級	4,000円	8,400円
準1級	3,000円	6,900円
2級	2,900円	5,800円
準2級	2,300円	4,500円
3級	1,600円	3,200円
4級	1,300円	2,600円
5級	1,300円	2,500円

■助成の対象となる方

学校教育法第1条に規定された学校のうち、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、高等専門学校に勤務する教員の方。

※海外校勤務の方はご利用いただけません。

お申し込み方法などの詳細は英検ウェブサイトをご確認ください。
<http://www.eiken.or.jp/eiken/group/teacher/>

「英検」2016年度第2回検定のご案内

幅広い年代の方々が受験する実用英語技能検定（英検）。第2回検定は8月1日から申込受付を開始します。試験日程は次の通りです。詳細は、英検ウェブサイトにてご確認ください。

<http://www.eiken.or.jp/eiken/schedule/>

INFORMATION

新サービス 「英検団体サポートシステム」 の提供を開始

英検協会が2016年度から提供を開始する新サービス「英検団体サポートシステム」は、実用英語技能検定（英検）の団体受験および英検IBAの申込責任者と受験する生徒、保護者の皆様のためのサービスです。

〔主な特徴〕

①個人別 受験案内状	受験者別の案内状を作成し、過去の試験結果や受験推奨級の提示が可能に
②検定料の個人支払	個人支払方法を選択できることで、検定料の支払・集金がより一層便利に
③英検対策・スタディギア連携	スタディギア for EIKEN ベーシックの学習状況を確認し、英検合格率や英語力の向上に
④受験結果の活用	団体内のこれまでの受験履歴や学年別の経年変化を比較し、学習指導の参考に

申込責任者にとっては、受験者個々の学習・受験履歴を一元管理し、校内全体の受験状況の把握や生徒個々へのきめ細かい学習指導が可能になります。また、検定料の個人支払や案内状の自動作成ができ、申込に関わる作業の負担も軽減します。受験者にとっては、過去の受験結果に基づき、英検の推奨級が表示され、適性なレベルを受験することが可能に。また、試験前にスタディギアの模擬試験機能を利用することで、可否の可能性や弱点を把握でき、合格に向けた学習分野が分かり、先生からのきめ細かいアドバイスも受けられます。さらに、保護者にとっては、検定料の支払方法の選択肢が増え、生徒に現金を持参させる懸念を解消できます。先生からの学習サポートに関する生徒個々に適した情報を受け取ることが可能になります。

一次試験

本会場（公開会場）

10月9日（日）

準会場（団体受験のみ）

10月8日（土）・9日（日）…全ての団体・学校

10月7日（金）…中学・高校のみ選択可

二次試験

11月6日（日）

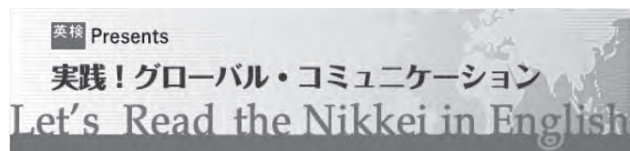
申込受付

8/1（月）～9/16（金）
協会必着

【9/14（水）書店締切】

INFORMATION

ラジオで楽しく英語学習！



ラジオ NIKKEI 第1にて、毎週木曜22時30分～23時（再放送は毎週土曜17時30分～18時）に、学生から社会人まで、幅広い年齢層や英語力に応じたラジオ番組「英検 Presents 実践! グローバル・コミュニケーション Let's Read the Nikkei in English」をオンエア中です。番組は、ラジオはもちろん、スマホ向けアプリ「radiko.jp」、ポッドキャストやオンデマンド配信で聴くことができます。

コーナー紹介

○今週のニュース

英語と経済を同時に学びます。『Nikkei Asian Review』（日本経済新聞社）の英字記事で、「時事英語」や「ビジネス英語」など、生きた英語をお伝えします。

○英語で授業! ～Discussions in English～

英検の級別（準1級／2・準2級／3・4級）にハリソン先生と生徒2人が英語でディスカッションに挑戦します。取り扱うトピックは時事問題から身近な話題まで幅広く、さまざまなトピックに対して自分の意見を英語で発信する力を養います。本コーナーの英語のセリフとその日本語訳、ディスカッションの参考記事は番組のウェブサイトに掲載しています。

〔過去のトピック例〕

高齢化社会、温暖化対策、東京五輪、海外留学、SNSの使い方、デジタル教科書

詳しくは、ラジオ NIKKEI ウェブサイトにてご確認ください。

実践! グローバル・コミュニケーション

検索

<http://www.radionikkei.jp/lr/>

EVENT

留学の魅力を学ぶ1日 英語圏大使館合同留学フェア2016

この夏、明治大学駿河台キャンパスに、英語圏主要5カ国の大使館・公的教育機関等が集まり、「英語圏大使館合同留学フェア2016」が開催されます。

参加無料
入退場自由

日時: 7月16日（土）11:00～17:30

会場: 明治大学 駿河台キャンパス アカデミーコモン2階

（〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1）

主な対象: 海外留学希望の中・高生、大学生、社会人

開催内容:

①国別・機関別相談ブース … 国・機関別ブースでの担当者と留学希望者による個別相談。なお、明治大学在学中の留学生および留学経験者もボランティアとしてブースに入り、体験談を話すなど相談のお手伝いをします。

②セミナー … 国別・機関別に留学情報（または留学に関連する情報）を提供します。なお、文部科学省担当者や安河内哲也先生・留学経験を持つ起業家による講演も行います。

③資料配布 … 参加団体・資料提供団体の資料配布・閲覧が可能です。

■お問い合わせ

公益財団法人日本英語検定協会 教育事業部

「海外留学フェア係」

TEL: 03-3266-8486

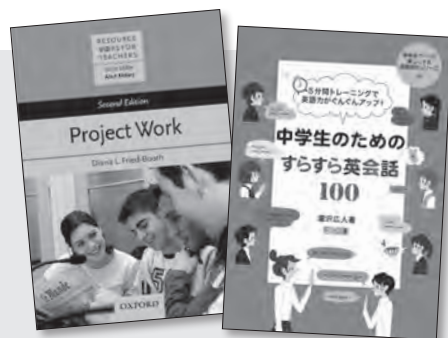
E-mail: support-kokusai@eiken.or.jp

ウェブサイト: <http://kbunsha.com/embassy/>



英語教育関連書籍2冊を 各1名様にプレゼント!

英語教育に関する著書2冊を、抽選で各1名様に差し上げます。本誌に関するアンケートにお答えいただき、ご希望の書籍番号をご明記のうえ、『英語情報』編集部までご応募ください。詳細はP.37をご参照ください。





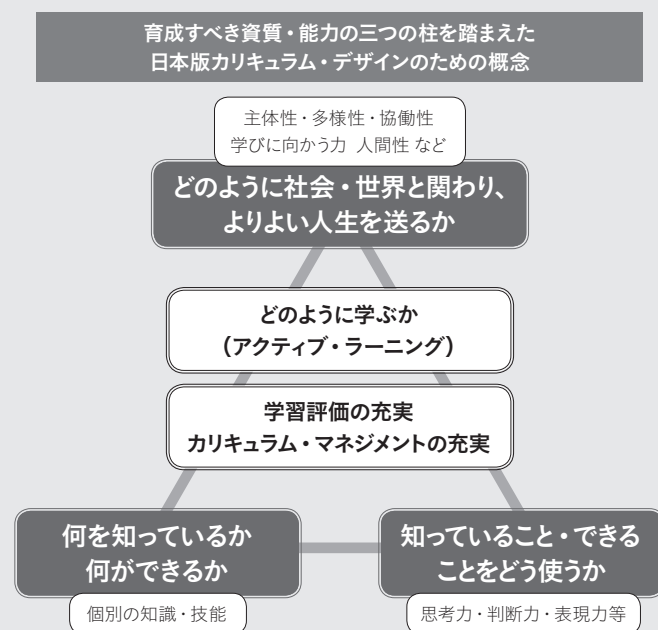
特集「授業改善を考える」

言語活動の充実と アクティブ・ラーニング

アクティブ・ラーニングとは何か？

文部科学省によると「アクティブ・ラーニング」とは、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」と定義される。つまり、児童生徒が自ら考え、主体的に協働しながら活動し、学びを深めていくことであり、その有効な方法として、「発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等」が示されている。

竹内教授は「世間では、アクティブ・ラーニングとは、児童生徒が『積極的に参加する学習』と思われがちですが、私は、『思考を活性化させる活動』ではないかと捉えています。頭を動かす、つまり、思考が活性化すると、その過程において、児童生徒は自分なりに判断し表現することになりますから、その意味で、『思考力・判断力・表現力等』を育むことができる学習となるでしょう」と述べる。



文部科学省「外国語ワーキンググループにおけるこれまでの検討事項に関する論点 補足資料」(2016年1月)より

なぜ、アクティブ・ラーニングが必要なのか？

これまでの学校教育では、教師から生徒へという一方通行の知識伝達型の授業が中心に行われてきた。「知識・技能の習得」に重点が置かれていたのだ。しかし、現在求められているのは、「知識・技能を活用して、課題を解決する力を身に付けること」である。また、グローバル化の進展する社会では、既存の知識だけでは複雑化する社会的・地球的課題を解決することができず、「他者と協働しながら新しい知識を生み出し、課題を解決していく力」が必要となる。このような社会の状況に対応するために、アクティブ・ラーニングの必要性が説かれるようになった。

では、なぜアクティブ・ラーニングの過程に協働が重要なのか。竹内教授は「思考を深めるには、他者とつながることが重要です。自分だけの考えには限界があっても、他者とつながる

ことで、その限界を克服することができます。2人、3人、4人…と、多くの人とつながることによって、より思考が深まる可能性があるのです」と強調する。そして、「私も授業でよく学生にさせてみるのですが、まずは課題を与えて、自分だけで考えさせます。5分間考えたら、隣の席の学生と話し合い、2人で考えさせます。さらに5分後には後ろの席の学生も交えて話し合いをさせます。そうやって人数を増やしながら考えて議論したことによって、最初の自分の考えから、どれだけ広がり、変わったのかを体感するのです。その時に忘れてはならないのは、考えたり話し合ったりする前に、課題について15分ほどの講義を私が行い、議論の前提として必要な知識をしっかりと定着させておくことです。そうすることで、議論の内容が深まるのです」とアクティブ・ラーニングの過程について、説明した。

現行の学習指導要領では、「思考力・判断力・表現力等」を育み、各教科等の目標を実現するための手立てとして、「言語活動の充実」を規定している。そして、次期学習指導要領においては、「思考力・判断力・表現力等」を育むために、「アクティブ・ラーニングの視点に立った深い学び、対話的な学び、主体的な学びの実現」が求められる。英語教育においては、授業に「アクティブ・ラーニング」をいかに取り入れていけばよいのか。関西大学外国語学部長の竹内理教授とともに、「言語活動の充実とアクティブ・ラーニング」について考える。

●監修：竹内 理（たけうち・おさむ）

関西大学外国語学部長（外国語学部長、大学院外国語教育学研究科科長）。専門分野は、英語教育学（学習方略、学習者要因）と外国語教育におけるメディアの利用。神戸市外国語大学大学院外国語学研究科修了後、同志社女子大学短期大学部研究助手に着任。専任講師時代にフルブライト奨学金を得て米国に留学し、モントレー大学院を首席で修了（MATESOL）。帰国後、同志社女子大学学芸学部助教授および関西大学総合情報学部助教授を経て、現職。外国語学習方略の研究で兵庫教育大学大学院連合学校教育研究科より博士号（学校教育学）を取得。

言語活動の充実のためには

一斉授業だけではなく…



ペアで意見を交換する



ホワイトボードを使って
話し合う



付箋を使って話し合う

文部科学省「外国語ワーキンググループにおけるこれまでの検討事項に関する論点 補足資料」（2016年1月）より

普段着のアクティブ・ラーニングを

アクティブ・ラーニングを授業に取り入れるには、どうしたらよいのか。

竹内教授によれば、必ずしもプロジェクト型（PBL）授業である必要はなく、日々の授業の中で取り入れているペアワークやグループワークでも、アクティブ・ラーニングに十分なり得るのだという。そして、「アクティブ・ラーニングという、大がかりな課題解決を伴う学習をしなければいけない、と不安に感じる先生もいらっしゃると思いますが、実は、簡単にアクティブ・ラーニングはできるのです。大それたことではなく、普段着のアクティブ・ラーニングでよいのです。PBLは学期に1～2回程度として、普段通りの授業で、いかに児童生徒の思考を活性化するか、ということを考えて授業を設計しましょう」と呼び掛ける。

例えば、音読をする際にも、アクティブ・ラーニングの手法は取り入れられる。教科書本文から1つのパラグラフを取り上げ、文の順番を入れ替えた状態のプリントを生徒に配り、ペアで一文ずつ順番に読み合い、正しい順番に並べ替えるという活動を取り入れれば、生徒は英文をただ声に出して読むのではなく、正しい順番を考えながら読むとうするだろう。また、「読んだ後に、本文の内容についての質問をします」と告げてから活動に入らせれば、内容を理解しようと意識しながら読むことになる。さらにどんな質問をされるだろうか、前もってペ

アで考えさせるのも思考の活性化に役立つ。

また、ライティング活動でもアクティブ・ラーニングを実践することができる。例えば、授業中のグループ活動でブレインストーミングした内容について、生徒各自が家庭学習をし、英文にまとめてくる。その英文ライティングに教師がフィードバックすることで、生徒は何を改善すればよいのかを考え、よりよい表現を生み出そうとする。このように、教師と生徒の間でもアクティブ・ラーニングが成り立つ。また、各自が書いてきた英文をペアで見せ合い、お互いの英文のどこが良くて、どこを直せばよいのかを考えて話し合わせることをしてもよい。こうすれば生徒同士の学び合いのなかでも、思考が活性化する。

活動に取り組む際には、「なぜ」その活動をするのか、と「到達目標」を生徒に明確に示したうえで活動に取り組むことが大切だ。

「CAN-DO リストと同様の考え方ですが、その活動によって、何がどの程度できるようになるのかという到達目標を生徒に示す必要があります。一方、教師は、その目標に向けてどのように授業を設計するのか、を考えることが大切です。授業形態は、講義であっても、ドリルであっても、演習形式であっても、目標に応じて違ってよいのです。この際に、思考の活性化や知識・技能の統合を目標にするのならば、アクティブ・ラーニングが最適だけなのです。無理して、何がなんでもアクティブ・ラーニングを全面的にやる必要はないのです。

アクティブ・ラーニングと教師の役割

生徒主体の授業を進めるなかでは、生徒同士の学び合いが多くなる。そのような授業において教師に求められるのは、生徒たちの言語活動がどこへ向かうのか、活動がつまづいていないのか、現時点の生徒たちにとって難しい活動ではないのかなど、状況を判断し、導いていく力だ。そのためには、授業の全体像をしっかりとイメージできていることが必要であり、生徒たちが安心して言語活動に取り組める親和関係を築いていかなければならない。

竹内教授は「これまでの教師に求められた力と、これからの時代の教師に求められる力は大きく変わってきているのです。アクティブ・ラーニングとは、アクティブ・ティーチングでもあるのです。先生方には『教えたい』という衝動を抑えながら、『どうしたら思考が活性化するか』を考え、その方向へ向かわせる、いわばファシリテーターのような役割が求められま

アクティブ・ラーニングとは、
思考を活性化させる活動。

——竹内教授

す。そして、目の前の状況を見て、判断し、対応する、即応力も身に付けていかなければなりません」と強調する。

なかには、自分の意見を述べるのが苦手な生徒もいるだろう。そうした生徒の学びへの意欲をいかに引き出せばよいのかについては、「苦手な生徒には無理をしなくていいと言いたところですが、これからの時代は、自分で思考し、判断し、表現する力がなければ、さまざまな困難と直面することになるでしょう。だからこそ、このような活動をすることで、これからの社会で生きていくための術を身に付けようとしている、と生徒に前もって説明しておく必要があります。時代によって求められる学力は変化します。これを考えると、嫌い・苦手であってもよいが、やらなくてもよいとは言えないのです。ただし、そうした生徒が好む別の学習形態でも学びが保証されるよう、ある程度の多様性を持たせる配慮が教師側には必要でしょう」と説明する。

アクティブ・ラーニングを実質化するには？

アクティブ・ラーニングを取り入れた授業は活気にあふれ、生徒も主体的に活動に参加することが多い。だが、知識・技能はどこまで定着するのか。

「アクティブ・ラーニングでは、従来考えてきた知識・技能の定着とは異なる観点から、定着を捉える必要があるでしょう。例えば、不定詞を使ってグループで議論したとしましょう。多くの生徒は不定詞を使って発話することができるようになるでしょうが、不定詞について説明することはできないかもしれません。従来であれば、不定詞とは何かを説明できることが知識とされてきましたが、異なる知識、つまり使用のための知識が定着することとなるのです。こうなると、テストや評価のやり方も変えていかねばなりません」

また、思考を深め、英語で発信するためには、さまざまな知識の基盤が重要となる。そのためには、教科間連携が効果的であると竹内教授は考える。「例えば、社会科で調べた内容について、英語でプレゼンテーションをするようなことも可能です」。社会科の授業で与えられたテーマについて調べる際には、日本語で資料を読んでもよい。そして、英語の授業では「調べた内容

を発表するために、この構文を使って表現してみよう」と示し、表現の方法や提示の方法を検討させる。そうしてグループで英文を作り、どうしたら相手に分かりやすい発表になるかを考え、プレゼンテーションを行う。発表を聞いた生徒は、内容について、意見を述べたり、質問をしたりする。このように教科を超えた学びが成り立ち、生徒の思考が深まっていく。

「現行の高等学校学習指導要領には授業は英語で行うことを基本とする、とありますが、次期学習指導要領では、中学校でもそのような授業が求められるでしょう。しかしアクティブ・ラーニングをするのなら、中学校、特に1、2年生の段階では、生徒の英語力に応じて、適宜、日本語も織り交ぜて、生徒の思考を深めていくことも必要だと思います。次第に英語での活動に慣れ、英語力が付いてきたら、英語に切り替えていけばよいのです」と竹内教授。「思考、判断、表現の力や、主体的に他者と協働する力は、汎用的能力であり、英語以外の教科でも伸ばすことが可能です。無理をして英語で全て引き受けなくて、他教科と協働していくことも大切。英語科でできることは何かをよく考えて、アクティブ・ラーニングを実施して行きたいものです」と結んだ。

CLASS REPORT

学校訪問 高等学校編

宮城県石巻高等学校
武田 誠 先生

生徒が主体的に言語活動に取り組む授業で 思考力・判断力・表現力を養う

2011年度から、生徒が主体的に言語活動に取り組む授業へと切り替え、生徒の思考力・判断力・表現力を高めている宮城県石巻高等学校。ペアワークやグループワークなど「授業でしかできないこと」を重視する英語科の武田誠先生は、大学入試のためではなく、生徒が社会に出たときに、自分の考えを英語で発信できるようになることを目指した授業づくりに励んでいる。3年生の「コミュニケーション英語Ⅲ」の授業を訪ねた。

言語活動中心の授業への転換は5年前

2011年度より、宮城県教育委員会の「先進的英語教育充実支援事業」指定校となった石巻高等学校では、文法訳読型の授業から、生徒主体の言語活動中心の授業へと切り替えた。未曾有の大震災から1カ月後のことだった。授業を成り立たせることさえ大変な時期だったが、武田誠先生によれば「前を向いて新しいことに挑戦していこう。生徒の将来を考えて、とにかくがんばるしかない」と授業改善に取り組むことを決めたのだという。そして、初年度はまず、事業の委員となった教員1名が切り替え、2012年度からは武田先生が加わり、さらに2013年度からは学校全体での授業改善が始まった。

生徒の言葉を引き出し、自分の発言が授業をつくと気付かせる

同校の「コミュニケーション英語」の授業では、正確な英語よりも、生徒が英語を使って話したり書いたりすることを重視し、「英語表現」の授業では正しい表現を意識した活動を取り入れる。「社会に出たときに、自分の考えを英語で発信できる生徒を育てる」という目標に向けて、教員が一丸となって生徒主体の授業改善に取り組む。教科書は生徒の思考力を刺激するテーマが豊富な、イギリスのオックスフォード大学出版局の『Q : Skills for Success』を使用し、1Unitを6時間で終える。前時では、True or Falseの質問で本文の内容を大まかに捉えたうえで、音声教材を聞きながら本文を読み進め、再度 True or Falseの質問に答えて、内容理解を深めている。4時間目にあたるこの日は前時の内容を踏まえて、題材の「Job Interview」を実際に体験するSpeaking中心の授業だった。

「読む際は初見の文章を大枠で捉えます。完全に理解することは求めず、7割程度理解できればよしとしています。今日は、『面接で理想的な第一印象を与えるにはどうすべきか』を考えさせました。次の授業では、悪い印象を与える態度についても意見を出し合います。最後の授業では、これまでの活動を通して出された考えをもとに、生徒が自分の考えを10文程度の英文でまとめます」

武田先生は授業中、生徒の発言に注意深く耳を傾け、生徒自身の言葉を引き出すように導いていく。たとえ生徒が言い間違えても否定はせず、発言を褒めながら、言い直しにより気付きを促す。そして、話してから書き、その内容を発表するという技能を統合した活動を重視している。

このような授業を進めるためには、「教員が答えを決めない」ことが大事だと武田先生は考える。答えを決めてしまうと、生徒の意外なレスポンスに即座に反応できないからだ。さらに「授業を通じて生徒間の人間関係が構築されます。私たちは人間教育をしたいんです」と述べた。実際に授業中には、生徒たちが友達と協力しながら活動し、発話が苦手な生徒がいれば、周りの生徒が励ますという姿が随所で見受けられた。

「生徒が一人で悩まずに、みんなで助け合っている授業の雰囲気が好きなんです。とにかく生徒主体で活動すること。それが生徒の思考力・判断力・表現力を高めることにつながります」。自身も授業を楽しむ武田先生。その気持ちが生徒に伝わり、生徒たちは英語で活動することを楽しみながら、主体的に授業に参加していた。

授業の流れ

1 ペアワーク (Listening & Speaking)

教科書本文のJob Interviewの内容に基づいた、ペアでのインタビュー活動。Be prepared. Dress the part. Be punctual. Make eye contact. など、ワークシートに記された「仕事をするうえで重視される態度や行動など10のヒント」を頼りに、「何が重要か」「どれが難しいか」について、その理由も含めて質疑応答をする。生徒たちは、質問し合いながら、自分なりの考え

を自分の言葉で相手に伝えていた。5分間活動した後、武田先生から指名された生徒が、発表する。Be punctual. と答えた生徒は、“Time doesn't back.”と理由を述べた。武田先生は生徒の発言を受けて、“Oh, time doesn't go back.”と正しく言い直して生徒たちに気付きを促し、発言した生徒を“Great!”とにこやかに褒めていた。



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。
(アプリの詳細は表紙の裏面へ)

武田先生の
授業の様子は
こちら

2 模擬面接 (Listening & Speaking)

就職面接や大学入試の面接を想定した模擬面接をする。活動を始めるにあたり武田先生は、“What do you want to do?”と面接官からの質問例を示し、生徒からも質問したらよいと思う内容について意見を集める。すると、“What is your strong point?” “What is your hobby?” “What is your dream?”などと次々と声が上がった。そして活動開始。生徒たちは席を立ててパートナーを見つけ、じゃんけんをして質問者と回答者の役を決め、模

擬面接をする。質問者は受験者の応答に対して、リアクションを取りながら、話題を広げる質問を即興で加えていく。そうして生き生きと会話を繰り広げる生徒たちの様子を、武田先生は終始笑顔で温かく見守る。質問者は相手の応答の態度について、ワークシートに書かれたPoliteness、Clothing / Hairstyle、Eye contact、Attitude / Confidenceの観点に応じて、Great、Good、Fair、Poorの4段階で評価し、気付いた点も書き留めていく。その



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

後は着席して、自分が模擬面接をした中で良いと思った人について発表し、その理由を述べ、クラス全体で共有する。

3 グループワーク 1 (Speaking & Writing)

続いて、4人グループで「相手に良い印象を与えるために大切なこと」について話し合う。発言することが苦手な生徒に対して、周りの生徒たちは“Smile!” “Keep talking!”などと励ましていた。その後、武田先生は、話し合いで出たキーワードについて、黒板に書くよう指示を出した。生徒たちは、争うようにキーワードを書き出していく。Big smile、Eye contact、Small talkなどとキーワードが出そうと、それらをもと

に、ワークシートに自分の意見とその理由を書く活動に移る。その際に、武田先生は「Opinion → Reason → Conclusion」の構成を意識するよう、書き方のルールを示した。そして生徒たちが書き終えるのを見届けると、数人の生徒に発表させた。Smileが大事だと発表した生徒は、その理由について「笑顔は印象を良くする一番の方法であり、笑顔は人を幸せな気持ちにするから」と述べた。発表を聞いた武田先生と生徒た



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

ちは、拍手でその発言をたたえ、教室には温かい空気が満ちあふれた。



生徒にインタビュー

授業を通じて4技能を高め、自信を持って英語を使って活動する生徒たち。英語の授業を受けて感じていることや、将来の夢について聞いた。



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

CLASS REPORT

学校訪問

中学校編

山口県 山口市立大殿中学校
中沢 純子 先生

短時間で区切った活動を展開し 生徒が楽しいと思える瞬間をつくる

2015年度より2カ年で国立教育政策研究所による

「教育課程研究指定校事業」の指定校となった山口市立大殿中学校。

「自分の考えを適切に伝えられる生徒の育成～言語活動における場面設定の工夫や学び合いを通して～」をテーマに掲げ、生徒の言語活動を充実させるべく研究に取り組んでいる。

2年生担当の中沢純子先生の授業を訪ね、生徒たちが英語を使うことを楽しみ、生き生きと活動する様子を取材した。

生徒同士が助け合い、学び合う習慣が生まれた

研究テーマ設定の背景として、大殿中学校では「生徒の表現力が低い」という課題があった。そこで、生徒が自信を持って表現することができるよう、「必然性のある場面設定」と「生徒同士の学び合い」に着目して、この1年間研究に取り組んできた。授業では教科書の題材を応用した言語活動を取り入れ、生徒が楽しんで英語を使って主体的に活動できることを目指し、最終的には自分の考えを適切に伝えることができるようになることを目標としている。

「生徒同士が助け合い、学び合うことがごく自然な習慣になった」と中沢先生は言う。分からないときは友達に聞いてよい、友達に聞かれたら教えてよい。分からないと言うことは恥ずかしくない。そうした空気が教室に生まれた。「間違いを怖れずに、自分の考えを相手に伝えることができることを目標に、さまざまな言語活動を取り入れていきます。活動を通じて達成感を味わうことができれば、生徒は自信を持つことができ、英語を楽しんで使うことができるようになりますと考えています。どうしたら生徒が楽しんで活動できるかを常に考えて、授業計画を立てています」。中沢先生は、生徒が自分の言葉を発するのを待ち、生徒が自ら学ぼうとする姿勢を養おうと温かい目で見守っている。

必然性のある場面設定で英語を使う経験を

同校では全学年を通じて「どの生徒も楽しく活動すること、一人の生徒も取りこぼさないこと」を目指した授業づくりを心掛けている。この日の授業では、前時で覚えたlook＋形容詞の表現と、過去進行形を使った表現も織り交ぜて情景描写をする活動にグループで取り組んだ。生徒は自分なりの言葉で、相手に伝えようと思いを巡らせる。そして、友達の発言に耳を傾け、お互いに褒めたり、助言したりしながら、生徒同士で学びを深めていく。

「今日はインフォメーションギャップのあるなかで、生徒が英語を話さざるを得ない状況をつくりました。英語が得意なある生徒が、百人一首をしている写真についてどう表現していいか思い付かず、私に助けを求めました。そこで、“They were playing karuta.”と言ってみたらとアドバイスをすると、思うように表現できなくて悔しそうな表情を浮かべていました。でも、それでよいと思います。一度そうした経験をすれば、次に同じような場面に遭遇したときにはきっと、自信を持ってその表現を使うことができますから」

実は中沢先生自身はもともと英語が苦手だったが、英語の歌との出会いによって英語への扉が開かれたという。だからこそ、生徒にも楽しんで英語に触れてほしいと切に願う。そして、「理想としては、国境を越えて地球人として、幅広くコミュニケーションを取れる人であってほしいと思いますが、日常生活では英語の必然性を感じる場面に遭遇しづらいのが実情です。でも、授業で英語での言語活動を経験し、いつの間にか英語で道案内ができるようになっていたというようなことがあれば、英語ができてよかったと実感できるでしょう。相手に自分の思いを伝え、相手の思いを受け止めることのできるバランス感覚を養っていきたいと思います」と述べた。

授業の流れ

1 導入

洋楽のポップソングを2、3週間かけて1曲全員で歌い、英語を話す空気をつくる。ターゲットとなる文型が歌詞のサビ部分に使われている曲を選び、授業でその文型に触れたときに、生徒が「あのときの歌だ!」と思えるように仕掛けている。街で偶然にその曲が流れて、思わず歌ってしまったとい

う声も聞かれるという。英語の授業で歌った曲が好きになって、インターネットでその歌について調べて、CDを買って聞いている生徒もいる。英語は苦手でも、歌の時間は楽しいという生徒もいる。授業のどの場面でもよいので、生徒が楽しめる瞬間をつくりたいという中沢先生の工夫だ。



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。
(アプリの詳細は表紙の裏面へ)

中沢先生の
授業の様子は
こちら

2 帯活動（ペアワークによる Q&A 活動）

ワークシートを使ってペアでのQ&A活動に取り組む。“Do you like ...?” “Are you...?”に対して、Yes / Noで答えるだけでなく、その後に1センテンス付け加え、思考力や表現力を高める。まず、中沢先生と山口市学力アシストの鬼村亜希子先生でモデルを示す。ペアでの質疑応答を終えたら、パートナーを替えて、再度活動すると、教室に

活気が出始めた。“Do you like sports?” “Yes, I do. I like soccer.”など、生徒たちは自分の知っている語彙を使いながら表現していた。続いて、3つのグループに分かれ、「バラバラクエスチョンズ」に取り組む。グループ内でパートナーを30秒単位で次々と交代しながら、いろいろな友達と会話をする。その際、相手の回答に対して“Oh, no!”



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

“Really?”などのリアクションの表現も使いながら、会話を広げる練習をした。

3 語彙学習

フラッシュカードを使い、本文で学ぶ重要語を声に出して覚える。英語を見ながら発音し、日本語の意味を理解したら、次は、日本語を見ながら英語を言い、スペルを確認する。その後、ペアでワークシートを使って、一方が日本語の意味を言い、もう一方が英語で発音してからつづりを言う練習をする。役割を交代して同様に活動し、最後にワークシートに単

語を書く練習をする。さらにペアワークは続く。ワークシートには、重要語部分が空欄になったAとBによる会話文が示されている。一方の生徒はワークシートを見ながら会話文を読み、もう一方の生徒はどの語が入るかを考えて答える。答えに詰まると、もう一方の生徒が教科書本文からヒントを示す。ひと通り終えたら役割を交代して同様に活動し、次はワーク



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

シートだけを見ながら、AとBの役に分かれてセリフを言い、役割を交代して活動を終える。

4 情景描写

黒板に貼り出されたhungry, tired, happyなど、6つの状態を表す絵カードで形容詞を理解し、4人組でのグループワークに入る。ここで、本時のめあて「写真の説明をして、どの写真のことかを当ててもらおう!」が示される。絵カードで覚えた形容詞を使って表現できる6枚の写真が各グループに配られる。一人が写真を選び、ほかの

生徒には見せずに、“They look happy.”のように、どんな状態かを描写する。すると、もう一人の生徒が“What were they doing?”と尋ね、質問された生徒は“They were eating.”と説明を加える。ほかの二人の生徒は、そのやり取りから「お弁当を食べている写真」と推測して回答する。ターゲットとなる構文を使って会話を広げながら、生



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

徒自身がどのような場面でその構文を使えばよいのかを理解できる活動となっていた。

生徒にインタビュー

ペアやグループでのバリエーション豊かな活動に取り組む生徒たち。
英語の授業を受けて感じていることや、将来の夢について聞いた。



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

CLASS REPORT

学校訪問

小学校編

岐阜県 多治見市立笠原小学校

勝部 佳純 先生

言語活動を通じて育まれる 伝えようとする意欲と相手を思う気持ち

2003年から長年にわたり、文部科学省の「英語教育研究開発学校」に指定され、先進的な研究に取り組んできた多治見市立笠原小学校。「笠原型コンテンツ・ベイス」の手法を軸に据えた言語活動により、児童のコミュニケーションに対する意欲が育まれてきた。今年度からは教科化を先取りして、さらなる研究を進めている。英語科の勝部佳純先生が担当する6年生の授業を取材した。

同じ言語材料を繰り返し使いながら定着させる

教室には児童たちの明るい笑顔と元気に英語を話す声があふれる。笠原校区では2002年より「幼保小中一貫教育」による英語教育に取り組んでおり、児童たちは英語を使って気持ちを伝え合うことに慣れ親しんでいる。同校では独自に開発した教材を使い、1単元を概ね4～8時間構成とし「導入の時間～中盤の時間～終末の時間」という流れで学ぶ。導入の時間では単元の言語材料に初めて触れる。中盤の時間では、同じ言語材料を話題を変えて繰り返し使いながら、定着させていく。終末の時間では言語材料を使ったインタビューやプレゼンテーション等の問題解決的な活動を行う。取材当日は終末の時間にあたり「相手の話に感想の言葉を付け加えながら聞く」ことをゴールとした。この単元は家庭科の「生活時間を見直そう」の単元と連携している。児童は“What time do you ... ?”や“How long do you ... ?”という言語材料を使って友達的生活時間についてインタビューし、相手の話に感想を述べながら会話を繰り返し広げた。

言語活動を充実させる工夫と教科化にあたっての課題

「教科化のポイントは、言語材料をいかに定着させるか」だと勝部先生。「今日は、児童が言語材料を理解して使うことができていました。ただし、感想を述べることは、まだ現時点では単語レベルの表現にすぎません。卒業時には文で感想を述べられるまでに引き上げていきたいですね」と語る。その際、初めから教え込むのではなく、児童の「言いたい、伝えたい」という気持ちに応じて表現を示すことを大切にするという。そして、児童の言語活動を充実させるためには、長年の研究で培われた「笠原型コンテンツ・ベイス」という指導法が効果を発揮している。これは、他教科の学習とも連携して、取り組む必然性のある課題を設定し、児童が英語を使いながら問題解決をしていくものだ。授業では、他教科と連携しながら児童の知的好奇心をくすぐる題材を扱い、活動に取り組む。

文字の扱いも課題とされた。同校では1年生から大文字、2年生は小文字に触れる。3年生からは文字を扱う単元を導入し、大文字と小文字をマッチングさせる。4～6年生でも同様に文字に特化した単元を扱う。そして卒業時には、文字表記のルールを理解して、4線の正しい位置に文字を書き写すことができることを到達目標とし、中学校への橋渡しをする。今後は評価も課題の1つだ。今年度からはパフォーマンステストを年4回実施し、文字を扱う単元ではペーパーテストも導入する。

同校の研究は、E学習（授業）、E活動（テレビ番組を用いた週2回の朝活動）、E体験（国際交流の日）、E環境（掲示物や校内放送）、E研修（教員研修）という「5つのE（English）」が支えてきた。教務主任の塚田雅弘先生は、教科化のカギを握るのはE研修だと考える。同校には英語科免許を持つ教員が4名おり、3年生から6年生に各1名配置されている。1、2年生はクラス担任が指導にあたるため、英語科教員によるE研修を通じて、指導力を高めていく。

「これまでの外国語活動を通じて、子供たちには、困っている相手を助けようとする心が育っています。社会へ出てからも、人との関わりの中で助け合い、何かを生み出していく人になれると信じています」と、塚田先生は目を輝かせた。



教務主任の塚田 雅弘先生

授業の流れ

1 ペアワーク

ペアでのQ&A活動。質問が書かれた絵カードをめくり、その内容について“What time do you get up?” “How long do you watch TV on Wednesday?”などと質疑応答をする。まず、勝部先生とALTのBob先生によるデモンストレーション

で、どのような活動をするのかを児童に示した後、活動に入った。じゃんけんで勝った児童がカードをめくり、相手に質問をする。元気な声が教室に響き、質問された児童は自分の言葉で相手に答えを伝えていた。

勝部先生の
授業の様子は
こちら



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。
(アプリの詳細は表紙の裏面へ)

2 インタビュー

本時のめあてとして「グループで考えた質問をして、クラスの仲間について大発見しよう!」が児童に示される。児童が使う表現は“What time do you ... ?” “How long do you ... ?”の質問文だ。黒板に示された11の動作を表す絵カードを参考に、児童は友達へ質問をする。その際、勝部先生は「相手の話に感想の言葉を付け加えながら聞く」ことを意識して応答するよう指示を出した。「例えば、どのような言葉が考えられる?」と児童に投げ掛けると、“Really?” “Unbelievable!” “Amazing!”などの表現が挙がった。その後、コの字型に配置された机の内側に

質問するグループの児童を集め、どの質問をするのかを児童自身に考えさせて、活動を開始した。児童たちは、ワークシートを手にして、回答するグループの児童の席を尋ね回る。聞き取った答えをワークシートに書き込んでいき、5分間活動した後、質問したグループの児童たちに、勝部先生は「質問してみて、自分が言いたいことが言えなくて困った人いない?」と尋ねた。「早いな!」と言いたかったという児童に対して、どのように言えばよいのかをBob先生が“That’s early!”と教える。加えて、「遅いなと言うには?」と言う勝部先生の問い掛けに、今までに習った言葉を思い



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

出しながら“Slowly!”と答える児童たち。すかさずBob先生は“Nice try!”と褒めながら、“That’s late.”と言うことを教えた。そして、役割を交代して活動した後、グループに戻って集めた回答から情報を分析し、驚いたことを発表し合った。

3 振り返り

各自で授業の振り返りをする。インタビューをしてクラスの仲間について大発見したことについて、コメントシートに記入する。書き終えた後は、発表に移る。「登校時間を尋ねると、3分と答えた人もいれば、1時間半と答えた人もいる」「寝る時間を聞いたら、6時間寝る人が多くて、自分は10時間寝るので、6時間と答えた人は（寝る時間が）少ないなと思った」と、児童たちは驚きを伝えていた。そ

して最後に、児童の発表に対して、勝部先生から「普段一緒に生活している仲間のことでも、こうして生活時間を尋ねてみると意外なことが分かって面白いね。この質問は難しいかと思ったけれど、みんなよくできていました」と評価のコメントが伝えられた。Bob先生は「私もたくさん児童にインタビューしてみましたが、黒板に示している質問だけでなく、答えから広げた質問にも、みんなよくがんばっ



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

て答えることができていました」と褒めて授業を終えた。



児童にインタビュー

元気よく英語で会話を繰り返し広げていた児童たちに、英語を使って将来どんなことをしてみたいか、授業を受けて感じていることについて聞いた。



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

CLASSROOM ENGLISH!!!

この連載では、「毎日の授業で使える便利な表現」を紹介していきます。今回は、ディスカッション・宿題を出すという2つの場面で使える表現です。生徒の発話を促す表現から生徒に返す表現、授業を活性化させる表現まで…明日から使えるものばかりです！

大木 優喜子 (おおき・ゆきこ)

ハワイ東海インターナショナルカレッジ准教授。東京生まれ、アメリカ・カリフォルニア州ロサンゼルス育ちのサード・カルチャーキッド (Third Culture Kid) 〓。ハワイ州ハワイパシフィック大学にてTESOL (Teaching English as a Second Language) 英語教育学修士号を首席で取得した。研究範囲はFlipped Classroom Model, Student Motivation in ESL Classrooms等。

※母国で生まれるが幼児期や思春期を外国で過ごし、母国と外国の二つの文化を総合した三つ目の文化を自身のアイデンティティとして構築した人。



★ Discussion : 教科書で習った情報の理解、生徒の意見を促す

1. “Why was Taka surprised about Halloween?”
2. “What is your favorite holiday?” / “Why do you like that holiday?”
3. “Do you think that holiday began in Japan or in another country? Why do you think so?”
4. “Do you think that holiday is celebrated in other countries?”
5. “Do you think people celebrate that holiday differently in other countries? How?”

例えば、教科書の題材でホリデーについて扱い、本文で読んだ内容を理解できているかを確認するには、“Why was Taka surprised about Halloween?”のように、“What.../When.../Where.../Why.../Who.../How...”の5W1Hから始まる質問を投げ掛けるとよいでしょう。そして、生徒には“Taka was surprised because Halloween is similar to Obon in Japan.”のように、文で答えさせます。文で答えてほしいときには“Can you tell me in a complete sentence?” “Please answer in a complete sentence.”と呼びかけます。

そして、教科書で学んだことをさらに応用する際には、“What is your favorite holiday?” “Why do you like that holiday?”と尋ねたり、“Do you think that holiday began in Japan or in another country? Why do you think so?” “Do you think that holiday is celebrated in other countries?” “Do you think people celebrate that holiday differently in other countries? How?”のように、教科書本文には答えが書かれていないような質問をして、生徒自身の考える力を鍛えてみましょう。

★ Homework / End of class : 宿題を出すとき・授業の終わり

1. “For homework, please read page 10. Also, complete this handout. Choose 1 holiday that began in another country, draw a picture in the box and answer these 5 questions in complete sentences. Please write in your own words.”
2. “So, what page are you going to read for homework?”
3. “How many holidays are you going to choose?”
4. “What are you going to write on this handout?”
5. “Whose words are you going to use? The internet’s words?”
6. “Good job today everyone. See you tomorrow!”

宿題を出すときには、“For homework, please read page 10. Also, complete this handout. Choose 1 holiday that began in another country, draw a picture in the box and answer these 5 questions in complete sentences. Please write in your own words.”のように言います。宿題について説明したら、生徒が理解できているかを必ず確認しましょう。“So, what page are you going to read for homework?” “How many holidays are you going to choose?” “Can you choose

a Japanese holiday?” “What are you going to write on this handout?” “Whose words are you going to use? The internet’s words?”と具体的に聞いてみましょう。また、ホワイトボードに宿題を書いておくと、生徒の理解を促すことができます。

最後に、“Good job today everyone. See you tomorrow!”と言って、がんばって授業を受けた生徒を褒めてから、授業を終えるようにしましょう。

〈つづく〉



安河内哲也先生が聞く

英語で授業

明日から
使える！

7つの鉄則

新潟県立新発田高等学校
根立 望 先生生徒の力は無限大。多様性を受け入れ、
自分の考えを伝え合う態度を養う授業

新潟県立新発田高等学校は、1896 (明治 29) 年に創立された長い歴史を持つ伝統校です。
下越地方を代表する進学校として、地域の信頼を集め、卒業生は県内はもちろん、国内外で広く活躍しています。
理数科の英語の授業を担当している根立望先生に、英語で授業を行う7つの鉄則を伺いました。

根立 望 (ねだち・のぞみ)

2012年に新潟県立新発田高等学校に着任。「英語を通して子供たちの視野を広げたい」と願い、生徒の言語活動中心の授業づくりを推進中。自己研鑽にも努力を惜しまず、2児の母として育児に奮闘しながらも、さまざまな研究会、ワークショップに参加し、英語力を磨いている。

本日の授業

「コミュニケーション英語Ⅲ」3年1組 (理数科)

Lesson1 「Speak out for the Future」『PRO-VISION English Communication III』(桐原書店)



1. Warm-up activity



2. Review



3. Activity 1

この日の授業は、2012年にリオデジャネイロで開催された地球サミット (国連持続可能な開発会議：リオ+20) における、環境保護活動家であるカナダ人のセヴァン・スズキさんによるスピーチをもとに、「地球全体に関わる問題」や「持続可能な開発」について考え、私たちはどのような未来を創造していくべきかについて考えることを題材とした。

根立先生はまず、授業の流れを説明し、Warm-up activityに入った。この日の活動はペアでのDefinitionsだ。生徒は1分間の制限時間内でパートナーから与えられた英単語について英語での説明文を作る。与えられた語句について、その場で定義付けをすることで即興力が養われる。

その後は、Reviewに移った。セヴァンさ

んのスピーチ映像が映し出されると、根立先生は、誰のスピーチであるかを生徒に問い、前時に読んだ教科書の内容を思い出しながら、映像を見るようにと指示した。1992年の地球サミットで、12歳ながらも6分間にわたり、環境破壊がもたらす未来の地球について主張し、世界中の注目を浴びたセヴァンさん。それから20年の時を経て、再び地球サミットでスピーチを行った映像だった。そして、「このスピーチの内容は教科書のどの部分にあたるものか」を話し合わせた。さらに「セヴァンさんが話す未来とは誰のためのものか?」など、Q&Aを通して教科書の内容を復習した。

授業のメインとなる活動は、教室を国際会議場と見立てた「Shiba+20」でのスピーチ

だ。根立先生から、「ここは小さなサミットの場です。みなさんは、未来投資のために、地球が抱える現状についてスピーチを行います。最も良かったスピーチには、大富豪が出資します」と、スピーチの場面が設定された。生徒たちは、4人一組のグループで活動し、Government officer / Scientist / Civil society / Global citizenの役を選び、「未来」について堂々とスピーチをした。その後、生徒たちは大富豪役になり、最も良かったスピーチを決める。さらに、1人の生徒が全体の前で発表し、意見をクラスで共有した。最後に、根立先生は、「スピーチをより説得力あるものにするためには、主張～理由～事例～結論の順で述べる必要がある」ということを伝え、授業を終えた。

根立先生の
授業の様子は
こちら

鉄則その1 「ラポール」が大切。

「ラポール (rapport)」とは、教師と生徒、生徒同士の信頼関係を意味します。英語を話すとなると、生徒に負荷がかかるものです。そこで、生徒には「間違えてもよいから、安心して自分が考えていることを伝えよう」という空間をつくりたいと思っています。そして、英語は使って間違えながら、覚えていけばよ

いのだと伝えています。さらに「相手の意見を聞くことも大事にしましょう」と話しています。Good communicatorの第一歩は、Good listenerであることです。あとは、「違いを楽しむ」ということも大切です。教室で多様な価値観に触れながら、相手の意見を受け入れ、自分の意見を発信する。そうして

教師と生徒、生徒同士の信頼関係を構築していくのです。



鉄則その2 目標を生徒と共有する。

私は授業には見通しを持つことが大切だと考え、そのような授業ができるよう模索しています。そこでまず、3年間という大きな時間のなかで、生徒にこのような力を付けさせたいという到達目標を示す必要があります。それを学年、学期、単元というように、大きな時間から小さな時間まで落とし込ん

でいき、そのなかでどのような力が身に付くのかということを、生徒にも学期の初めや各授業の初めに共有するのです。例えば、教科書で著名なスピーチの原稿を読んだ後には、生徒自身もミニスピーチをできるようになるということです。それには、授業を1時間終えたときに、生徒がどのようになっている

らよいか、というイメージを描くことから計画を立てるようにしています。



鉄則その3 教室のritualをつくる。

「ritual」とは、授業の基本的な流れを意味します。私の授業が始まる時は、「いつもこれから始まるよね!」という流れを生徒に理解させておくのです。まずは「Hello!」と声を掛けながら教室に入り、生徒にさりげないことを英語で聞いてみるなどして、教室の空気を少しずつ暖め始めます。そして、授業が始まった

ら、ウォームアップとして、生徒同士で自由に話をする時間をつくります。今日は、Definitionを取り入れました。3年生になってからは生徒の語彙量が増え、ペアで定義し合う語も難易度が上がり、面白い活動になっています。この活動が、教科書で読んでいる内容を自分が知っている英語で言い直す活動にもつなが

ります。あとは、相手を褒めることを忘れないということも大切にしています。



鉄則その4 パターンを示して使わせる。

生徒には話したいことを伝えるための「発話パターン」を示しています。そのパターンに沿って話せば、生徒は自分の意見を伝えられます。例えば「私は夏が好きです」のように、まず自分の意見を述べます。次に理由を挙げます。理由が3つある場合には「私が夏を好きな理由は、3つあります」と先に伝え

ます。その際、必ず「以上の理由から、私は夏が好きなのです」とまとめるようにします。このように、最後に自分の主張を、もう一度形を変えて述べます。なお、理由を述べる際には、根拠となるデータを示すことで、より説得力が増すことも教えています。また、グループでの議論を進める発話パターンも教える

ことで、英語が苦手な生徒でも、最低限のコミュニケーションを取りながら活動を進められるようにしています。



鉄則その5 違いが生まれる質問をする。

例えば、教科書に「このような未来が描かれている」と書かれていたら、その内容について問うのではなく、「あなた自身の描く未来像は?」と問い掛け、生徒が多様な考えを出し合えるような発問をしています。生徒からは面白い意見がたくさん出てきます。未知の表現が飛び出したときは、

語彙を広げるチャンスです。その表現を共有すれば、語彙が豊かになりますよね。違いを受け入れるということは、国際人の感覚です。文化背景や価値観の違う人と話すときには、相手を受け入れることが大切です。それを教室で学ぶことができれば、生徒たちは卒業した後でも、違いを認

めながら、自分の意見を発信することのできる人に育つでしょう。



鉄則その6 失敗も経験させる。

授業では失敗してもよいとしています。その悔しい気持ちを明日につなげることが大切なのです。例えば、自分の意見を、準備してきたように言えなかったなど。でも、「今日はできなくても、明日はできる」という場面を用意してあげれば、失敗は成功に変わります。そうした小さな成功体験のためには、うまくいか

ない思いも必要なのです。そして、失敗しても生徒を責めることはしません。むしろ「失敗は大切!」としています。生徒たちが言いたいことがあってうまく伝えられず、モヤモヤしている気持ちが伝わるのがよくあります。それでもがんばって話し続けようとしていたら、その態度を褒めるのです。生徒が発言したこ

とを正しく言い換えて周りが理解できるように手助けすることを忘れずに。



鉄則その7 Brush up my English skills.

英語で授業を行う秘訣は、教員自身が英語力を磨くことにあると思います。教員には2つの役割があります。1つは、良き英語学習者、良き英語話者であること。モデルとなる先生の授業を見て、生徒たちが話す英語が授業者の英語の写しであることに気付きました。そこで、もっと自分の英語力を

磨かなくてはと思ったのです。もう1つは、生徒の発話を引き出し、言い換えることのできる英語力を身に付けるということです。教員の英語力が磨かれる場合は、授業です。だからこそ英語で授業を行い、授業で積極的に英語を使いましょう。そして、教科書のCDを自然に口から出るまで繰り返し聞き、

練習してから授業に臨んでいます。



どのように教え、評価するのか。評価をどうするのが今後の課題。

安河内 新発田高等学校の英語教育は、どのような先生方が支えていますか。

根立 本校の英語科教員は才能豊かで生徒に対する熱意にあふれています。私もそうした先生方から刺激を受け、日々支えられています。

安河内 良い人間関係が築かれているのですね。学校全体で一体となって動いているのでしょうか。

根立 どちらかというと学年単位ですが、「学校全体がチームに」ということはこれから目指していきたいところですね。

安河内 学校として生徒の英語力をどのように伸ばしていくかということでは、CAN-DOリストが重要ですね。

根立 本校もCAN-DOリストを作成しましたが、それを活用した指導には到達していないのが実情です。今後はCAN-DOリストを教員が共有して指導計画を立てることが必要です。

安河内 授業を変えたら、評価も変えなければなりません。高校生には大学入試の壁が立ちはだかりますが、授業が定期考査だけでなく、大学入試にも、外部試験にも、グローバル化に対応した英語力を高めることにつながるというように、全てがイコールで結ばれることが重要です。

根立 全てを網羅し、生徒の英語力を適切に評価できるテストを作りたいですね。

安河内 これまでは定期考査も大学入試もリーディングが大半を占め、あとはリスニングが少し入る程度。2技能の評価でした。しかし、現在は4技能を統合した言語活動中心の授業をしていますから、評

価も4技能を測らなければなりません。スピーキングはどのように評価していますか。

根立 今のところ、パフォーマンステストは授業で行っています。テストは、生徒は読んだ内容と感想を1分間で述べるというものです。生徒が話している様子は録画しておき、後で評価の材料とします。今後は、3人グループで、与えられたテーマについて話すことをパフォーマンステストとして実施する予定です。

安河内 さて、根立先生が現在のような授業スタイルに切り替えたきっかけは？

根立 実は失敗の経験からきています。2013年度から学習指導要領が改訂され、高等学校では「英語の授業は英語で行うことを基本とする」という方向に変わるということを知り、興味が湧きました。ちょうど校内研修でそのような機会を得たので、英語で授業を行ってみたところ、教室の空気が悪くなってしまったのです。

安河内 どのように？

根立 それまでの私は日本語で授業を行い、時には笑いも織り交ぜていました。それが突然、まくしたてるように英語で話し始めたら、生徒はスピードについてこれず、英語を理解できなかったのです。そして、「なぜ理解できないの?」と、さらに威圧的に英語で話し続けました。でも、私が英語で話せば話すほど、生徒たちが引いていって…という状態に陥ってしまったのです。

安河内 先生の発話速度は大事ですよね。私は英語で講演する際、できる限りゆっくりと話すようにしています。“Today... I will... talk about... how to study

English... in the best way... OK?”のよう。それでも相手が理解できなければ、日本語も添えて理解を促します。

根立 生徒は一度ついていけないと感じると、自分だけ置いてきぼりになったように思い、輪に入ってこれなくなりますよね。こうした失敗の経験をバネにして、授業改善に取り組んできました。

安河内 授業は先生が英語を話すのではなく、生徒が英語を使って活動する場。授業でしかできないことを授業することが大切です。音読もその1つでしょう。音読で身に付くのは、日本語を介在せずに直読直解する力であり、音読とは、リスニング力を鍛え、inputを促進するための活動です。音読をすれば生徒の自発的発話力が高まるという過度な期待はしないことです。

根立 音読をさせる際のコツは？

安河内 朝活動で音読を取り入れると、授業にスムーズに移行できますよ。ICTを活用して、電子黒板などに教科書本文を文字で映して音声を流し、時間制限を設けたり、テンポの良い音楽に乗せたりして音読するなどの工夫をすると、生徒も夢になります。音読を終えたら、洋楽を歌って朝活動終了。朝の10分間で、英語を話すことを楽しむ空気が生まれます。

根立 楽しそうですね。ぜひ取り入れてみたいです！

安河内 音読の題材は教科書がよいでしょう。教科書の英文はクオリティが高く、内容も面白いですから、もっと活用すべきです。それには、生徒にとって少し易しく感じられる英語のレベルの教科書を使うと、言語活動がしやすくなります。

根立 いろいろと参考になるお話がありありがとうございます。

安河内 最後に、根立先生は、新発田高等学校の生徒たちに、英語を学んで将来どのような人に育ってほしいですか。

根立 多様な人たちの中に飛び込んでいき、自分らしさを他者のために生かすこともできる人に育ってほしいですね。

(文中敬称略)

interviewer

安河内 哲也 (やすこうち・てつや)
一般財団法人実用英語推進機構代表理事、東進ハイスクール、東進ビジネススクール英語講師。文部科学省「英語教育の在り方に関する有識者会議」委員を務める。英語学習の楽しさを世に広めるべく、テレビ番組などでも大活躍中。英検1級など英語関連の多数の資格を持つことでも知られる。

私の鉄則

ここでは、読者の皆様が実践していっしょに「鉄則」をご紹介します。多数ご応募くださった中から、安河内哲也先生と編集部で選んだ「私の鉄則」を掲載し、安河内先生からコメントをいただきました。

國學院栃木高等学校 大島 秀郎 先生の鉄則

発音できる音は聞き取れる！

1時間の中に必ず「只管朗読^{しかん}」という時間を設け、音読学習を鉄則としています。その昔、故・國弘正雄氏からいただいたアイデアですが、「発音できる音は聞き取れる！」という信念を貫いております。

やってみせる

授業開きで、私が40年前に必死に覚えたリンカーンの「ゲティスバーグ演説」を暗唱して聞かせています。

言って聞かせる

「棒読み」になることを防ぐために、英文の構造・意味の区切り・発音を事前に徹底指導します。

させてみる

毎回授業開始直後の3分間只管(ひたすら)気持ちを込めて音読に集中させます。スクリプトは、実用英語技能検定二次試験準2級・2級の受験者用問題カードからの英文です。

褒めてやる

昼休みに中庭にある通称「グローバル・ベンチ」に座り、毎日3名ずつ英語で面談しています。そこでショート・プレゼンテーションの形で暗唱音読させ、褒めつつ助言します。



大島先生、ありがとうございます。私も故・國弘正雄先生には、上智大学時代に2年間教えていただきました。國弘先生は授業でも音読の重要性を強調されていました。「只管朗読」は私の英語力の基礎を作ってくれた勉強法でもあります。この言葉を取り上げていただきうれしく思います。

横浜市立山内中学校 安部 肇子 先生の鉄則

スモール・ステップで大きなoutputに仕上げる

生徒のoutputを促すために、スモール・ステップを大切にしています。

例：学校紹介のプレゼンテーション

Step1

最後のoutputのイメージを作る。

Step2

実施期間から逆算してタスクを考える。

Step3

生徒一人一人がPowerPointを用いてプレゼンテーションした様子を録画しておき、最後に学校紹介のDVDとして編集する。

Step4

仕上げた作品に対して、生徒同士または教師からのコメントを付けて学び合う。



安部先生、ありがとうございます。プロジェクトで学び合ったことは、英語のまま思い出に残りますよね。それがDVDとして仕上がったら、その中の英語は誰もがバッチリマスターできますね。何よりも、生徒たちが楽しそうな活動ですね。

募集中！

読者の皆さんの「鉄則」を募集します！

選ばれた「鉄則」には安河内先生がコメントし、サイン本をプレゼント！

読者の皆さんが日頃から実践している「鉄則」をご応募ください。安河内先生と編集部で厳選した「鉄則」について、『英語情報』誌面にて安河内先生のコメントとともにをご紹介します。さらに、掲載された方には、安河内先生のサイン入り著書『ゼロからスタート英文法 (CD付き)』(Jリサーチ出版/本体1,400円+税)をプレゼント！以下の内容をお書き添えいただき、「英語情報編集部」まで、FAXもしくはメールにてお送りください。たくさんのご応募をお待ちしています！

- | | |
|------------------------|------------------------|
| ① 氏名 | ④ 実践している「鉄則」1つと、その詳細内容 |
| ② 所属(勤務校名)・役職 | ⑤ 今号で興味深かった記事とその理由 |
| ③ 連絡先(住所、電話番号、メールアドレス) | ⑥ 今後、本誌で取り上げてほしい内容や意見 |

〈応募の宛先〉 03-5439-6879 eigojoho@morecolor.com

※いただいた個人情報は本件以外の目的には使用いたしません ※本誌で紹介させていただく場合は、学校名・お名前を掲載いたします

安河内先生のサイン入り著書をプレゼント！



上智大学・言語教育研究センター長の吉田研作特別招聘教授とともに考える。

高等学校教育

大学入学者選抜

大学教育

各大学の教育理念に基づく三つの方針の
一体的な策定を法令上位置付け、ガイドラインを作成

入学者受入れの方針
(アドミッション・ポリシー)

教育課程編成・実施の方針
(カリキュラム・ポリシー)

卒業認定・学位授与の方針
(ディプロマ・ポリシー)

個別選抜の改革

ポリシーに沿った選抜

多面的な評価の推進

⇒学習評価の改善
⇒多様な学習成果を測定するツールの充実

大学入学希望者学力評価テスト（仮称）の結果

イ 自らの考えに基づき論を立てて記述させる評価方法

ウ 高校時代の学習・活動歴

エ エッセイ

オ 大学入学希望理由書、学修計画書

カ 面接、ディベート、集団討論、プレゼンテーション

**右の3要素を
左のような方法で評価**

①知識・技能

②思考力・判断力・表現力等

③主体性を持って
多様な人々と協働
して学ぶ態度

○卒業後を見据えた社会との連携強化

**大学入学希望者学力
評価テスト（仮称）の導入**

2016年3月 文部科学省「高大接続システム改革会議 最終報告」より抜粋

知識を習得し、それを活用して思考する。そして、他者と協働しながら、思考を深め、判断し、自分の考えを述べる。こうした能力は、社会に出てから一朝一夕で身に付くものではありません。小学校段階からの積み重ねによって身に付くものです。主体性や協働する力も、授業を通して経験することで、育まれていくのです。ぜひ、日々の授業のなかで、アクティブ・ラーニングを取り入れ、「学力の3要素」を意識した指導を実践していただきたいと思います。それこそが、結果的に大学入試を突破する力にもつながり、生徒が社会でたくましく生き抜いていく力となるのです。



大学入試から変わる日本の 英語教育

Shinichi IZUMI

上智大学 外国語学部 教授 和泉 伸一



〔連載〕第2回

4技能統合型の“循環学習”のススメ

第2回目となる本稿では、実際の高校英語授業の際に、どのような活動が求められるのかについて述べていきたい。最初に、英語科であり得る活動を、インプットとアウトプット志向、そして「分析的学習(analytic learning)」と「体験的学習(experiential learning)」の2つの観点から見よう。

和泉 伸一 (いずみ・しんいち)

ハワイ大学マノア校客員研究員、オークランド大学客員研究員を経て、2016年4月上智大学外国語学部英語学科学科長、教授。専門は、第二言語習得研究と英語教育。主な著書として、『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』（大修館書店）、『フォーカス・オン・フォームとCLILの英語授業』（アルク）などがある。

まず【表1】に示したのが、これら2つの観点から見た英語授業の活動内容例である。【表1】では、インプットとは受信側面を、アウトプットとは発信側面を表している。ここでは、あえて「インプット」と「アウトプット」という言葉を緩い意味で使っており、第二言語習得で用いる「インプット」（言葉の“生”データ）と「アウトプット」（自らの意思を表す試み）とは異なる。「分析的学習」とは、言葉の形式に焦点を当て、その構造を意識した学習方法を指す。それに対して、「体験的学習」とは、実際に“使う”ことを強調した学びであり、4技能を通したコミュニケーション（意思疎通）を行うことで学びを深めていく方法である。

体験的学習の重要性

ここで、いくつか指摘しておきたいことがある。まず、日本の英語教育ではインプットが重視されていると言われることがあるが、この表を見る限り、そこで言われるインプットとは分析的学習に偏ったものであり、必ずしも体験的学習を考えての主張ではないことが多い。そのため、従来型の学習でインプットは十分に与えられているという主張は、的を射たものではない。筆者が見る限り、日本の英語教育では体験的な意味でのインプットはまだ不足していると感じている。

また、英語授業でアウトプット補充のために、ドリル練習や音読練習を多く行うということがあるが、これも、分析的学習の面からしか見ていない主張で

	分析的学習	体験的学習
インプット志向	文法説明 練習問題 英文和訳 長文読解	リスニング (会話、放送、講義等の聞き取り) リーディング (物語、随筆、説明文、論文等の読み)
アウトプット志向	ドリル練習 書き換え練習 和文英訳 音読練習	スピーキング (会話、発表、議論、討論、交渉等) ライティング (エッセイ、レポート、手紙、ストーリー等)

【表1】インプットとアウトプット、分析的学習と体験的学習の観点から見た英語活動

ある。体験的学習で行うアウトプットとは、実際に自らの意思を伝えるために話したり、書いたりする活動を指し、単に決められた形式を使って練習するだけではない。そこには、意思伝達のためのはっきりとした目的があり、聞き手・読み手を意識して、どこまで何を伝えるべきかといったことを考慮して行うのが普通である。このような体験的な意味でのアウトプットは、日本の英語授業ではまだまだ不足していると感じる。要するに、単に「耳にした」、「訳した」、「口にした」、「書き換えた」という活動を英語の4技能と勘違いしてはならない。

4技能統合型の学習

次期指導要領では、特に発信能力をより一層重視した形となっている。しかし、それは決して受信能力を過少評価しているものではないと解釈する。発信能力はしっかりとした受信能力の基盤の上にしか成り立たないため、アウトプット力を鍛えるためには、相応のインプットが必要となることは当然である。発信能力といっても、考えないところから発信できることはないし、薄っぺらな内容のことを発信しても、そこに大した価値はない。そのため、やはりよく聞き、よく読み、よく考え、表現力を駆使して発信していくことが必要となる。そのためには、必然的に4技能が統合された英語授業

となっていくほかはない。

何かのトピックに関しての話を聞いて（教師、または生徒同士のスモール・トークなどで授業を始め）、そこで興味が刺激され（興味深い事例についてオーラル・インタラクションを通して紹介し）、より詳しい情報や意見を知るために関連する読み物を読んでいく（教科書や他の読み物教材を情報源・刺激剤として使っていく）。読後は、そこで分かったことを要約して述べるとともに、自分の感想や意見も伝えなければならないタスクを設定する（読後タスクを事前に知らせ、読む目的感を高める）。中学でなら“I think it's good.”や“I was surprised.”などの簡単な感想でいいとしたならば、高校ではそれをさらに深めて、なぜそう思うのか？ その根拠は？ 対案は？ 想定される問題は？ 解決策は？といったことにより一層突っ込んで話が展開されていかなければならないだろう。

クラスで意見交換をした後は、自分の考えをまとめて書いてもらう。それをまた次の授業で発表する機会があると、さらなる意見交換の機会を生んで、新たなリーディングへと繋げていくことも可能だろう。これが自然な4技能を統合した授業の1つの姿である。キーワードは「統合」である。その対語は、「分離・独立・孤立」である。孤立した知識や技能を実践で生かすことは非

常に難しい。それぞれがほかとどのように関係しているのか、その関連性と重要性が見えないからである。だが、実際のコミュニケーションは、関連性のもとに成り立っているものである。

分析的学習と体験的学習の統合

当然、4技能を統合した一連の活動を行おうとする際、英語の指導が至るところで必要になってこよう。単語や文法について説明したり、一部訳させて内容理解を確認したり、生徒がアウトプットに困ったら、教科書に戻らせて、有用表現を探し拾わせたり、さまざまな分析的活動が体験的学習の合間に入ってくる。そうすることで意味のあるコンテキストの中で言葉遣いに注目した学習が可能となる。それが「フォーカス・オン・フォーム」と呼ばれる指導法のあり方である。いつも分析的・暗記学習が最初で、そこで定着したことを後で使っていくといった固定的なアプローチではなく、体験するなかで学習ニーズを感じて、それを分析的に学び、それを再度体験的に使っていく。こういった柔軟でダイナミックなアプローチが模索されるべきである。次期指導要領では、インプットとアウトプット、分析的学習と体験的学習が融合し、それぞれが有機的につながり循環する学びが求められているのである。

次期学習
指導要領に
向けて

中学校編

Kouichi
ANO

文教大学 国際学部 教授

文教大学大学院 国際学研究科 教授

阿野 幸一



(連載) 第2回

「授業は英語で行うことを基本とする」への取り組み

文法指導に「使う」の視点を取り入れるために

次期学習指導要領では、中学校でも「英語で授業を行うことを基本とする」という方向性が打ち出されています。本連載では、その意義を確認しながら、実際に中学校の教室で授業を行う際の方法や留意点について考えていきます。第2回は「英語で行う授業での文法指導について」です。

阿野 幸一 (あの・こういち)

文教大学国際学部教授・同大学院国際学研究科教授。専門は英語教育、応用言語学。主な著書に、中学校検定教科書『NEW HORIZON English Course 1・2・3』（共著、東京書籍）、高校検定教科書『All Aboard! Communication English I・II・III』（共著、東京書籍）、『みんなの楽しい英文法－「スタンプ例文」でわかる英語の基本』（NHK出版）など。NHKラジオ『基礎英語3』講師（2008－2012年度）、同『基礎英語2』講師（2013－2015年度）。

文法を「使うことができる」指導を

英語の授業で「文法を教える」というと、教師がターゲットになる文法を使った例文を板書して文法のルールを日本語で説明し、その後に生徒が問題演習を行うという昔ながらの教室の風景を思い浮かべるかもしれません。しかし、「文法を学び、使える」と考えれば、生徒が主役になり、教室で英語を使いながらコミュニケーションの手段として文法を活用している様子が思い浮かびませんか？ この違いを、パソコン教室での指導を例に考えてみましょう。前者の「文法を教える」は、パソコンが設置されていない教室で、教師がパソコンの説明書をテキストにして操作の仕方を説明し、それに

ついてのペーパーテストを解いているようなものです。教師が一通りの説明をしているので、パソコンが使えるようになるかどうかは、生徒自身の努力によることになります。これに対して、生徒一人に1台のパソコンがある教室で、教師がパソコンを操作して例を示し、生徒たちも自分でパソコンの操作をしながら覚えていくことが、実際にパソコンを使えるようになるための近道です。その際の生徒のゴールは、「パソコンの操作方法を覚える」ではなく、「文書を作成することができる」や「インターネットで検索することができる」というスキルを伸ばすことにあり、そのために「パソコンの使い方」を身に付けることになるのです。

文法指導にはform（形）、meaning（意味）、use（使い方）の3つの視点が欠かせません。There is構文を例に考えてみます。単数の名詞が来るときにはThere isを使い、複数名詞の場合にはThere areになるという形。そして「～がある」「～がいる」という意味を教えると思います。しかし、「聞き手にとって新しい情報を取り上げて話を始める」という使い方を生徒が身に付けていないために、Tokyo Disneyland is in Chiba.と表現するべきところをThere is Tokyo Disneyland in Chiba.という例文を作ってしまう現状があります。

新出文法事項の導入

新出文法を導入する際には、実際に教師が英語を使い、生徒に使用場面に対する「気付き」を与える必要があります。その際には、生徒との英語によるインタラクションを通して、生徒にとって身近な話題として新しい文法事項を提示することが大切です。

There is構文を導入する際には、「教師が訪れた観光地について、写真を見せながらやり取りする」などが考えられます。その観光地の話題は生徒にとっては新しい情報となるため、There is構文を使う場面になります。以下、教室での導入例です。

T: I had a great time last weekend.

I went to Matsumoto.

S1: 松本って長野？

T: That's right. Have you ever been to Matsumoto?

Ss: No.

T: Well, there is a beautiful castle in Matsumoto City. Look at this picture. (松本城の写真を見せながら)



Do you know this castle?

S2: Yes. 松本城！

S3: きれい！

T: Yes, it's very beautiful. The castle is about fifteen minutes' walk from Matsumoto Station. After I visited the castle, I ate soba for lunch. (そばの写真を見せる)



S4: おいしそう！

T: There are many soba restaurants in the town. Matsumoto is famous for its soba. I enjoyed it very much. Do you want to go to Matsumoto?

Ss: Yes!

生徒にとって新しい情報である「松本にあるお城」「松本のたくさんのおそば屋さん」をthere is/areで導入し、使い方の例示をします。もちろん、教室での実際のやり取りでは、この部分を繰り返すなどすることで、生徒の気付きを促す工夫を行います。こうした導入を受けて、There isがどのように使われていたかを生徒に質問し、「相手にとって新しい話題を示す」という使用場面を考えただけで明示的に理解させる指導が可能になります。その後、教科書本文を使ってThere is構文の形・意味・使い方を確認することで、生徒の理解を深めたいものです。

また英語で新出文法を導入する際に、生徒にとっての未習事項が入ることを心配する方がいらっしゃいますが、あまり気にする必要はありません。2年生の授業で教師が現在完了形を使っていても、生徒は状況からおおよその意味は判断できますし、3年生になって現在完了形を学習する際には、すでに一定量のインプットを吸収しているために、新出言語材料である現在完了形をスムーズに導入できるという

メリットもあります。

言語活動を通して定着を図る

生徒が新出文法の形・意味・使い方を理解しただけでは、実際にその文法を活用できるようになっているとは限りません。そこで、生徒自身がその文法を使う自然な場面を設定して表現活動をさせる必要があります。There is構文であれば、聞き手の生徒にとって新しい情報を伝える活動を用意することになります。例えば、生徒が自分の部屋を紹介するという活動がよく行われますが、家に自分の部屋がない生徒、あるいは部屋を紹介したくないという生徒もいるかも知れません。そこで「私の理想の部屋」として、「こんな部屋だったらいいなあ!」という部屋を考えて紹介するとよいでしょう。部屋にあるものを紹介するために、1つあるものには“There is…” 2つ以上あるものには“There are…”と使い分け、一度話題に出したもののなら“The desk is…”のようにSVの文にするという使い分けに注意させます。そして、聞き手の生徒に“Is there a computer in your room?”のように質問させることで、疑問文が活用できるかも確認できます。

クラスで生徒が一人ずつ発表していくことも考えられますが、時間的な制約や個々の生徒に多く発話させるために、ペアやグループで行ってもよいでしょう。その際、教師のモニターが難しければ、事前にモデル文で練習をさせて、形と使い方への注意を促すとともに、発表後に英文を書かせて確認することもできます。事前に原稿を作成すると、生徒は原稿を読むだけになり、There is構文を使い分けることができるかどうかの見取りも難しくなるため、部屋のイラストを描いて、そのイラストを聞き手に見せながら発表させることもできます。

今回は、「英語による教科書本文の内容理解」について考えます。

Ken OSHIRO

琉球大学 教育学部 教授 大城 賢



〔連載〕第2回

コミュニケーション能力の 「素地」「基礎」を養うための授業の作り方

今回は、次期学習指導要領において中学年で実施される外国語活動や、高学年で教科化される場合の目標や内容、さらに、教科化されたときの指導者の問題などについて検討しました。今回は外国語活動と、教科化された場合の英語の授業の違いについて、「素地」や「基礎」などのキーワードを取り上げて、読者からの質問にお答えする形で検討したいと思います。

大城 賢 (おおしろ・けん)

琉球大学教育学部卒業。琉球大学大学院教育学研究科(英語教育専修)修了。国立大学法人琉球大学教育学部教授。同附属中学校校長、同附属教育実践総合センター長などを歴任。学外の役職として、日本児童英語教育学会副会長、小学校英語教育学会常任理事、文部科学省研究開発学校企画評価会議委員など。

「コミュニケーション能力の素地」とは何ですか？

コミュニケーション能力の「素地」という言葉は、外国語活動を理解するうえで大切な言葉です。現行の「小学校学習指導要領解説：外国語活動編」によると、コミュニケーション能力の素地とは、「小学校段階で外国語活動を通して養われる、言語や文化に対する体験的な理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみを指したものである」(下線筆者)と記されています。「体験的な理解」とは説明などを通して言語や文化を知識として理解するのではなく、活動などの体験を通して理解を深めていくことを指しています。「態度」とは、積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢を指しています。「慣れ親しみ」とは、細かい文構造などに関する抽象的な概念を理解することではなく、あくまでも体験的な活動を通して、音声や表現に慣れ親しむことを指しています。しかし、この説明だけでは、なかなかイメージがつきにくいかもしれません。私は、「素地」とは何かを尋ねられたときにはいつも、『広辞苑』(第六版)にある「素地」の意味を使って説明しています。素地とは「さらに手を加えて仕上げるものとなるもの」です。つまり、「完成してはいないけれど、後で手を加えることによって完成するもの」が「素地」であると考えると分かりやすいのではないのでしょうか。

「基礎」とはどう違うのですか？

「基礎」についても、『広辞苑』によれば「それを前提として物事全体が成り立つような、もとい」とあります。前提として物事全体が成り立っていくわけですから、基礎ができていないと、全体が成り立たなくなることも考えられます。教科化された場合はコミュニケーションの基礎を育成することになります。つまり、外国語活動によって育成された素地に、さらに手を加えて完成形にしていくということです。

外国語活動の指導で 求められていることは？

現在、小学校の外国語活動では、先生と児童、児童同士による楽しいコミュニケーション活動が展開されています。例えば“What animal do you like?”と聞かれた児童が、“I like cat!”と大きな声で返答したとします。そうした児童の元気な受け答えに対して、先生も“Good!”などと反応しますね。この対話から、その児童が「猫が好きである」とは分かります。しかし、これでは英語としては未完成です。正しくは“I like cats.”というように、複数形を使う必要があるからです。しかし、外国語活動において求められるのは、「細かい文構造などに関する抽象的な概念を理解することではなく、あくまでも体験的な活動を通して、音声や表現に慣れ親しむ」ことですから、コミュニケーションを阻害しない限り、必要以上に文構造を説明したり、発音の練習をさせたりすることは必要ありません。

教科化された英語の授業では、どのような指導をするのですか？

しかし、素地から基礎へ(領域から教科へ)となれば、完成形が求められることになります。“I like cat.”という発話に対しては、先生のほうから明示的に“Oh, you like cats.”とrecast(=言い直し)等をする必要があります。そして、児童に、「文構造に関する気付き」をこれまで以上に促すことが求められることになります。「基礎」とは「それを前提として物事全体が成り立っていく」ことですから、これが分らないと、「複数にしない名詞もある」ということも理解できません。ですから、教科化された場合には、文部科学省の資料などにも示されているように、4技能を総合的・系統的に扱うことが求められ、日本語と英語の音声に関する気付きや語順など文構造の気付きなどを促すことが必要となるのです。『広辞苑』には「素地があるから上達も速い」という例文が載っています。「素地」と「基礎」を十分に理解して授業づくりを考えることが大切です。

上智大学が2016年10月より TEAP CBTを採用

上智大学では、2016年10月16日に実施予定のTEAP CBT (Computer Based Testing) を、「一般入学試験 (TEAP 利用型)」として採用することを決定した。TEAP CBTはTEAPのコンセプトを継承しつつ、コンピュータを用いて、複数の技能を統合的に運用する能力や、実践的な英語運用能力を測るテストだ。今春、新たに登場したTEAP CBTの特徴を紹介する。

TEAP CBT 開発の背景

英語教育改革や大学入試改革が進むなか、各大学では「聞く・話す・読む・書く」の4技能をバランスよく測定できる外部検定試験を入試に活用する動きが加速している。今後は、4技能の測定にとどまらず、複数の技能を統合的に運用する能力や、新学習指導要領に準拠した「思考力・判断力・表現力」を加味した、より実践的で多面的なテストの開発が求められていく。そこで、公益財団法人 日本英語検定協会では、このような現状を踏まえ、TEAPの発展形として、株式会社教育測定研究所とともに、コンピュータを用いた新テスト「TEAP CBT」の開発を進めてきた。

TEAP CBTとは どんなテスト？

TEAP CBTは、従来のTEAPの「大学で学習・研究する際に必要とされる英語運用能力をより正確に測定する」というコンセプトを継承し、さらに、グローバルに活動するために必要とされる実践的な英語運用能力を複合的に測定するテストだ。

まず、4技能から複数の技能を組み合わせた「統合型問題」を複数出題していることが特徴として挙げられる。そして、Speakingでは、よりテスト時間を長くし、Writingは統合型の問題を増やすことで、大学入学後に必要となる実践的な英語運用能力を測定することができる。

【TEAP CBT 問題構成の概要】

試験時間：約200分／満点：800点

※従来の紙のTEAPの場合…試験時間：約200分、満点：400点

※試験時間は、試験前後のインストラクション、試験間の休憩時間等を含みません

技能	試験時間	問題数	配点	解答方式	評価方法
Reading	約80分	50問	200点	コンピュータによる 択一選択方式 (一部、ドラッグ／ドロップにより解答する問題を含む)	コンピュータによる 自動採点
Listening	約40分	36問	200点	コンピュータによる 択一選択方式	
Writing	約50分	5問	200点	コンピュータの解答 エリアへのタイピング	認定された採点者による採点
Speaking	約30分	8問	200点	Facilitatorとの オンライン面接方式	

また、Speaking、Writingの問題数を増やすことで高い測定精度を保ちつつ、広範囲の難易度の問題を出題し、幅広い能力のレンジを測定する。さらに、大学生がキャンパスで遭遇する状況に合わせたタスクベースの出題を行う。

また、コンピュータで試験を実施することにより、英語での指示を解釈しながら操作を行うICT問題を導入し、より高度な思考力・判断力・表現力を問う問題を3種類出題する。そして、オンラインで実施する対面式のインタラクティブなSpeakingの出題が可能となった。

試験結果は、既存のTEAPスコアとの高い相関に基づき、4技能ごとの各セクションのTEAP CBTスコア／CEFRバンド／CSEスコアに加えて、TEAPの推定スコアも表示する。

上智大学の「一般入学試験 (TEAP 利用型)」とは？

上智大学の「一般入学試験 (TEAP 利用型)」は、従来のTEAP同様に、2016年10月16日に東京と大阪で実施予定のTEAP CBTを4技能受験し、学科が設定する基準スコアを4技能の総合点で満たしていれば出願可能とするものだ。

TEAP CBTの受験申し込みは、従来のTEAP同様にインターネットのみ。TEAP CBTに関する情報は随時、ウェブサイトにて更新する。

<http://www.eiken.or.jp/teap/cbt>

TEAP CBTのお問い合わせ：

英検サービスセンター(TEAP運営事務局)

TEL：03-3266-6556

※平日9:30～17:00 (祝日を除く)

TEAP 活用事例 第8回：明治大学

TEAPの高スコアを 総合点に加算

2017年度の入学試験で初めて実施される明治大学経営学部一般選抜の「英語4技能試験活用方式」は、TEAPを活用しつつ、他大学にはない個性的な判定法で注目を集めている。この方式では、国語と地歴・公民・数学から1科目を受験し、外国語はTEAP等のスコアを利用するため入試当日の試験は免除となる(スコアが所定の基準を上回っている必要がある)。ここまでは他大学の入試と変わりはないが、ユニークなのは、TEAPのスコアに応じた得点が国語と地歴・公民・数学2科目の合計点に加算され、総合点で可否を判定する点にある。例えば、TEAPの総合スコアが260以上なら合計点に20点加算され、280以上なら30点が加算される。つまり、TEAPのスコアが良ければ外国語が免除されるだけでなく、総合点にもポイントが反映される試験方式だ(※TEAPの総合スコアのみならずReading、Listening、Speaking、Writingの各スコアも基準を満たしている必要がある)。

TEAPはアカデミックスキルを 測ることができるテスト

約2年前、英語科から「外部英語テスト」の一般選抜入試への導入の提案がなされ、経営学部の入試制度検討委員会での検討が始まった。委員会の中心メンバーである大倉学教授は、「委員会の中にワーキンググループを作り、英語科の先生たちと相談しながら、教授会で報告を行い、さまざまな意見をいただき、それらをクリアしながら進めてきました」とプロセスを語る。英語科の山下佳江教授はTEAPについて、「高校生レベルで

対応できるアカデミックな内容、という印象を受けました。英語による大学での講義を理解できるかどうか、その力を判定できる内容だと思います」と評価する。

そして、山下教授は「単に英語が優れた学生を入学させたいのではなく、英語4技能をバランスよく身に付くような英語学習をしてきた学生を増やしたい」と

強調する。なぜなら、4技能が備わっていれば、異文化コミュニケーションも効率的に行うことができ、海外留学などの選択肢にも広がりやすい、と考えているからだ。さらに、それは明治大学経営学部の目標である「グローバル社会でリーダーシップをとって活躍できる人材の養成」につながるとした。

4技能の学びのバランスを重視した、 独自の試験方式に挑戦

明治大学経営学部は2017年度一般選抜にて、「英語4技能試験活用方式」を新設し、TEAPの活用を決めている。「4技能をバランスよく学んできた学生を入学させたい」という先には、特別編成クラス「GREAT」の存在があり、「グローバル社会でリーダーシップをとって活躍できる人材を輩出する」という明確な目標があった。経営学部の教務主任(入試担当)・入試制度検討委員会委員である大倉学教授と経営学部の山下佳江教授(GREAT運営担当)にお話をお聞きした。



経営学部 教務主任(入試担当)・
入試制度検討委員会委員 大倉 学 教授



経営学部 山下 佳江 教授 (GREAT 運営担当)

新方式での入学者の 今後の成長に期待

では、4技能試験活用方式によって入学してきた学生を「どのように」教育していくのか。それには、経営学部の「グローバル経営人材育成トラック GREAT (Global Resources English Applied Track)」というカリキュラムが受け皿になるだろう。これは、将来、国際ビジネスの分野で活躍を目指す学生のために開設された、特別編成の少人数クラスだ。英語スキルと専門知識を同時に磨き、グロー

バル・スタンダードを意識した学習活動を入学期より行う。『GREAT』は、4技能をバランスよく学んできた学生にとって、ふさわしい学習の場。また、『GREAT』があったからこそ、自信を持って4技能試験活用方式を推進できた」と、山下教授。そして、大倉教授は、「経営学部の定員650名のうち、新しい試験方式の枠は40名ですが、その40名が学部全体の中で『どんなポジションを作ってくれるのか』と、期待しています」と語る。他学部の入試関係委員会や他大学も、新方式の推移と結果を見守っているに違いない。



「開物成務」の名のもとに

明治維新から間もない1871（明治4）年に創立された開成学園。創立者の佐野鼎は、幕末に欧米を視察し、日本の近代化のためには日本においても学問・人格ともに優れた次世代を担う人材を育てることの重要性を痛感し、帰国後に学園を創立した。「開物成務（人間性を開拓、啓発し、人としての務めを成す）」「ペン（は剣よりも強し（どんな力にも屈することのない学問・言論の優位を信じる）」「質実剛健」「自由」を教育理念とする、中高一貫の男子校だ。6年間の学園生活を通して、生徒たちは素質を開花させ、自らを最も生かせる場で活躍し、互いに高め合いながら人格を磨き、将来への可能性を自らの手で切り開いていく。

2011年に就任した柳沢幸雄校長は、自らも同学園で学び、東京大学へ進学した。1984年から米国のハーバード大学へ渡り、十数年間にわたって教鞭を執った。その柳沢校長が、「18歳の集団として世界一の能力を持つ」と評するのが、開成学園の生徒たちである。

生徒が求めれば、学校が動く

35年連続で東京大学合格者数第1位という実績を持つ開成学園で、近年は海外の有名大学への進学者が増えてきた。そのきっかけを作ったのは、卒業生だった。2011年3月に東京大学へ進学したその卒業生は、ハーバード大学への進学を希望し、同年夏に柳沢校長を訪ねた。「大学に進んだ今、ハーバード大学でもう一度フレッシュマンから始めるの

は、時間の無駄。交換留学や大学院進学という道もある。ハーバード大学の学生に負けずに、週60時間勉強なさい」。柳沢校長に助言された卒業生は、ミシガン大学への交換留学を経て、プリンストン大学の博士課程に進んだ。そんな話を聞きつけた在校生の中から、海外進学を希望する生徒が現れた。そこで学園では、海外進学希望者のための体制を整えることになった。

「開成では学園が初めから環境を用意するのではなく、生徒の求めに応じて必要な組織をつくる風土があります。そこで、英語科の教員を米国へ派遣し、何が必要なかを理解してもらいました。そして、海外進学希望の生徒に、エッセイの書き方などをアドバイスできる体制を整えました。こうして“受け皿”ができたわけです」

最近では、海外大学のサマースクールに生徒が参加したり、中学1年生から高校3年生までを対象とした「カレッジフェア」を開催したりといった機会が広がった。「カレッジフェア」は毎年7月に開催され、米国のアイビー・リーグ、リベラル・アーツカレッジを始め、アジア、ヨーロッパの大学OBや入試担当者を招き、模擬授業、ディスカッション、プレゼンテーション、個別相談などを行う。

ほかにも、留学のポスターを掲示したり、数学オリンピックなど国際的なコンテストに関する情報を提供したりはする。ネイティブ講師の「英語特別講座」はライティングやディスカッションを重視し、海外大学進学準備講座を含む。興味を持つかどうかは生徒次第。だが、興味を持った生徒は、自ら歩み出す。

生徒自らが才能を開花させ、自らの手で

切り開く未来

開成学園 柳沢 幸雄 校長

18歳は自立に適した年齢

自主自律の空気が漂う開成学園では、教員が自身の専門性を生かし、創意工夫を凝らした授業が行われている。自主教材やプリントを用いて、基礎を体系的に固めながら、高度なレベルへと引き上げていく。また、部活動や行事も盛んで、高校2年生や3年生が中学生までを統率し、全てを取り仕切る。「教えることを経験すると、人は成長するものです。人間の発達段階において、中高一貫校であることは重要な意味を持ちます。本学園は先輩と後輩の結び付きが強く、年齢の近い集団での学び合いを大切にしています」

柳沢校長は、18歳は人間にとって自立に適した年齢だと強調する。「米国では、18歳という年齢は大きな意味を持ちます。18歳までは未成年であり、大人は家族でなくても注意をします。しかし、18

歳になれば、相手が意思表示をしない限り、手出しはしません。つまり、大人であるということは自分で表現することができ、認め合うことなのです」と述べた。

そして、「日本でも18歳になったら、一人で暮らすことを経験するとよい」と言う。「国内でも海外でもいいので、親元を離れること。自分で生活の質と豊かさを勝ち取ることを経験し、成熟することができでしょう。18歳で自立のタイミングを逃すと、自立への準備不足から、大人として成熟しきれなくなります」

グローバル化とは広域化

グローバル化の進展に伴い、グローバル人材の育成が急務とされる。柳沢校長は「グローバル化を解きほぐすと、それは『広域化』です。広域化とは、地域が広がっていくこと。日本が、この『広域化』を経験したのは1960年代の

ことでした。集団就職の時代、若者たちは住み慣れた地元や親元を離れ、都会に職を求めました。グローバル化の特徴は、地元を離れ、親元を離れ、言葉の違うところへ出て行くこと。食習慣も常識も生活習慣も違う、異文化に身を置くことになります」と説明する。

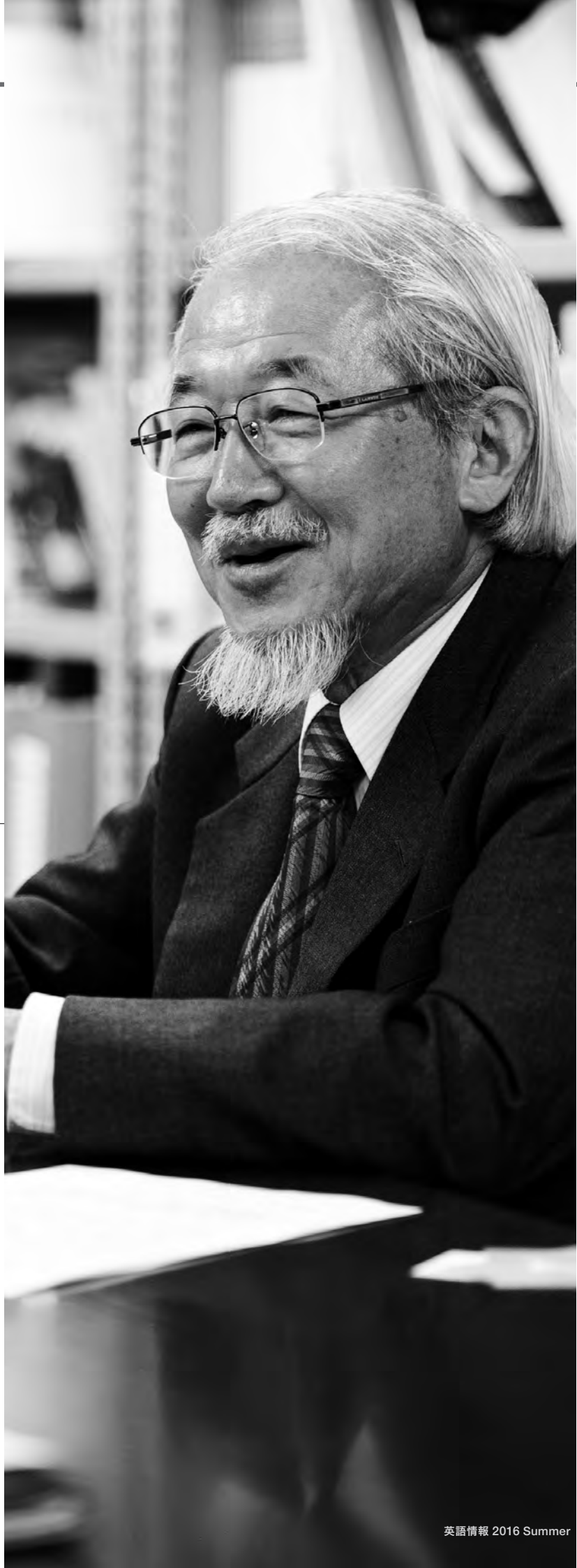
それを現代に置き換えれば、日本を離れ、世界へ出ていくこととなる。そして、当時も今も共通するのは、「社会の行き詰まり」があり、それを打破するために、広域化が進むということになる。

「集団就職をした団塊の世代は、自分の子に苦労はさせたくない、子を自分の元に置いた。団塊ジュニアが親となった現代では、社会の行き詰まりを目の当たりにして、このままでは立ち行かなくなるを感じています。短期的な視点で見たら、海外へ出て行く必要はないかもしれません。一方で、広

い視野を持ち、長いスパンで物事を見つめたなら、海外へ出ていく必要があるのかもしれませんが」

その選択は個々に委ねられる。だからこそ、学園を挙げてグローバル化を推進しようと舵を切ってはいない。

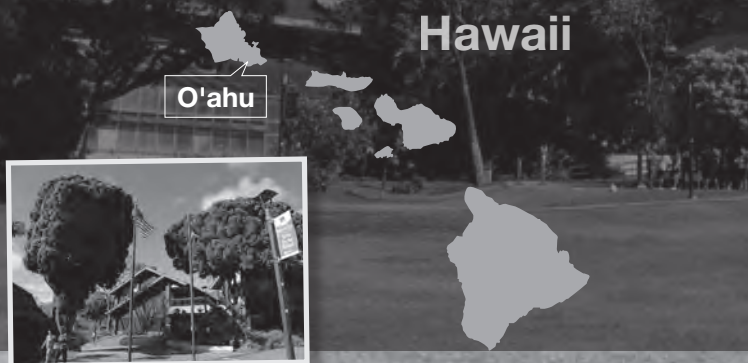
「ただし、餌は撒いておきます」と柳沢校長。「その餌に食いついてきたら、釣り上げる。例えば、卒業生が講演すると、その人のようになりたいと憧れ、真似していくうちに自分でもそうした道を歩き始めるという。そのような餌はたくさん撒いておきたいものです。進学とは、人生の途中経過にすぎません。60歳になり自分の人生を振り返ったとき、まずまず、いや若干プラスだったと思えるような人生を送ることができたら幸せですね。その土台を開成学園での生活で築くことができたなら、うれしい限りです」と笑みを浮かべた。



日本人留学生の6人に1人が 「英検で留学」!!

～ハワイ カピオラニ・コミュニティーカレッジの魅力とは?～

アメリカ合衆国で最も多くの日本人留学生を受け入れるハワイ州。なかでも、オアフ島にあるカピオラニ・コミュニティーカレッジ (Kapi'olani Community College: KCC) では、日本人留学生約280名のうち47名が、実用英語技能検定 (英検) を利用して入学している。これは約6人に1人の割合に当たるものだ。ハワイ留学やKCCの魅力について、現在留学中の学生たちの声も交えてご紹介しよう。



観光学科や料理学科など職業直結のプログラムが特色 4年制大学への編入も可能

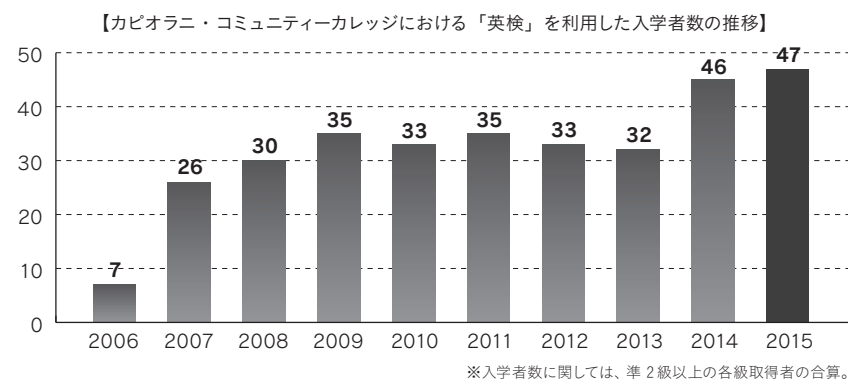
現在、英検は海外留学の際の「語学力証明資格」として、アメリカ合衆国をはじめ、オーストラリアやカナダ、ニュージーランドなど、約400の海外教育機関で認定されている。KCCでは2006年より、アメリカ合衆国で初めて、英検を語学力証明資格として認定し、その基準としては、ESOL (English for Speakers of Other Language Program) クラスでは準2級以上、ESOLを受講せず、正規授業で参加を認める場合には、2級A以上 (2級を一定基準以上の正答率で合格。ただし、2016年度第1回検定からCSEスコアで決定する) としている。

オアフ島のワイキキビーチにほど近く、ダイヤモンド・ヘッドのふもとに位置するKCC。1946年に設立された2年制の公立大学であり、一般教養と職業訓練のコースを擁する。観光学科や料理学科など、卒業後に即戦力として活躍できる

職業直結のユニークな専攻科目が充実する大学だ。修了後には、ハワイ内外の4年制大学へ多くの学生が編入する。緑豊かなキャンパスでは世界35カ国から集まった約8,000名もの学生たちが学んでいる。そのうち、日本人留学生は現在、約280名。さらにその中で、2015年は47名が英検を利用して留学していることが、KCCの調べで分かった。

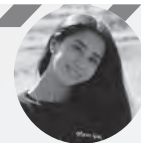
KCCにおいて留学生の受け入れを担当するTakashi Brandon Miyaki氏に

よると、2006年から英検を利用して留学する日本人の受け入れを開始して以来、入学者数は増加の一途をたどっているという。そして、「英検を利用して入学してくる学生の多くは、卒業時に大変優秀な成績を収めており、その後ハワイ大学に進学する学生も増えてきました。ハワイの最高のロケーションのなかで、一人でも多くの日本人留学生が一層、勉学にいそしみ研鑽を積んでもらうことを願ってやみません」と述べた。



留学生が語るハワイ留学の魅力

いつか、日本とハワイの
懸け橋になれば



大島 亜里紗さん
(英検1級取得: 2015年 兵庫県立国際高等学校卒業)

私は小学生の頃にハワイに住んでいたことがあります。留学に向けて、高校2年生で1級に合格し、2015年に高校卒業後、8月からKCCへ留学しました。現在はビジネスを専攻しています。KCCで基礎科目を2年間履修した後、University of Hawaii at Manoaへ編入し、さらに専門的に学ぶ予定です。ハワイはさまざまな国や文化の人々が集まる "melting pot" なので、毎日新たな発見ができます。誰でも温かく受け入れられ、私も留学生活にすぐ慣れることができました。また、KCC は海とダイヤモンドヘッドに挟まれた場所にキャンパスがあり、毎日きれいな景色を眺めながら勉強することができるのも魅力です。将来は日本とハワイで学んだことを生かして、日本とハワイの懸け橋になれるような仕事に就きたいです。

ハワイと日本をつなぐ
航空会社設立を夢に



扇浦 孔大さん
(英検準1級取得: 明治大学休学中)

私は大学2年次の秋学期から3年次の春学期までを休学して、KCCに留学しています。すでに取得していた英検準1級を利用して留学することができると知り、迷わず大学を休学してハワイへ留学することを決めました。KCCではホスピタリティ&ツーリズムを専攻しています。例えばある授業では、ハワイで観光業に就くための就職活動の進め方を学び、別の授業では実際に航空業界が使っているオンライン予約システムの使い方を習得するなど、授業はとても実践的な内容ばかりです。この留学を終えたら明治大学に復学し、卒業後はハワイ大学の大学院への進学を考えています。そしてその後は、航空会社に就職して航空業界のノウハウを学び、将来はハワイと日本をつなぐ航空会社の設立を目指しています。

異文化を感じながら
視野を広げられる



しめき
伊木 いぶきさん
(英検2級A取得: 高卒)

高校2年生の夏休みにハワイでの短期語学留学に参加した際、KCCの存在を知りました。観光学に興味があり、英検2級A以上合格で留学することができることから、高校卒業後にKCCへ進学しよう決めました。現在は、観光学の基礎から接客方法、実践を兼ねたインターンシップまで、さまざまな授業を履修しています。ハワイは移民によって成り立ち、多様な人種や国籍を持つ人々が共存する地域です。さらに独自のハワイアン文化も加わり、ほかの地域では経験できないような異文化に触れることができます。生活の中で、語学のみならず異文化に直接触れ、視野を広げる機会を得られるところに魅力を感じています。将来は、航空関係の職に就き、空港で働くことが夢です。KCCでの学びを生かし、夢をかなえるためがんばっています。



ハワイで「英検」が 受験できるようになりました！ ～ホノルル公開会場新設のお知らせ～

海外在住者や海外で教育を受ける日本人の実用英語技能検定（英検）受験をサポートするため、公益財団法人 日本英語技能検定協会（英検協会）では、海外公開会場を設けています。このたび2016年度より第1回検定より、ハワイ・ホノルル会場を新設し、海外での受験機会がさらに広がりました。

現在、英検協会が設置している海外公開会場は、イギリス・ロンドンおよび、アメリカ合衆国ニューヨーク、ロサンゼルスです。すでに海外在住の多くの方々にご受験いただいております。2016年度第1回検定より、ハワイ・ホノルルにおいても公開会場を新設し、さらに多くの方にお申し込みいただけることになりました。

【公開会場】

Kapi'olani Community College（カピオラニ・コミュニティーカレッジ）

【申込方法】

郵送による申込は受け付けておりません。必ず下記より、「インターネット申込」をご利用ください。

<http://www.step-eiken.org/hawaii/apply/online.html>

インターネット申込の流れは次の通りです。2級と準2級などのように、連続した2つの級は、同日に同一会場受験が可能です。ただし、いかなる場合も同じ級を重複して受験することはできません。お申し込み後のキャンセルについても、いかなる理由でもお受けできません。

なお、検定料のお支払いについては、クレジットカード（VISA・MASTER・JCB）およびPayPalのみとさせていただきます。PayPal支払いの場合は、PayPal口座からの引き落としとなります。

【検定料（税込）】

1級：90ドル／準1級：80ドル／2級：70ドル／準2級：60ドル／3級：50ドル／4級：40ドル／5級：40ドル

試験は、一次試験・二次試験のどちらかのみを海外会場でご受験いただくことも可能です。今後、英検の資格を留学に生かしたい方、日本に帰国予定で入試や就職に活用されたい方、また、ハワイ親子留学等で帰国前に英語力の伸長を試されたい方、語学研修の一環として海外で英検受験をお考えの団体のご担当の方…英検の活用方法は千差万別です。それぞれの目標に合わせて、英検取得を目指してみたいかがでしょうか。

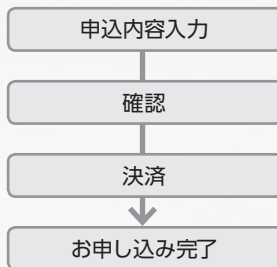
お問い合わせ先

英検サービスセンター

TEL: 03-3266-8311（営業日：月～金 祝日を除く／営業時間9:30～17:00）

海外公開会場受験に関する詳細は下記よりご確認ください。

<http://www.step-eiken.org/>



※受付完了メールが自動送信されます。



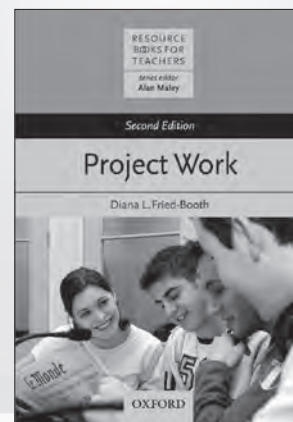
わたしのオススメ本

英語教育に携わる皆様にオススメの書籍をご紹介します。

今回は、CLASS REPORTで取材に訪れた学校の先生方から、明日からの授業づくりに役立つ書籍をご推薦いただきました。

1 『Resource Books for Teachers』（全30タイトル）より “Project Work : Second Edition”

Diana L. Fried - Booth
オックスフォード大学出版局 定価（本体3,620円＋税）
2002年4月11日刊行



宮城県石巻高等学校
武田 誠 先生

『Resource Books for Teachers』は、中学校・高等学校の授業で実践可能な教材やアイデアが満載のシリーズ本です。ペーパーバック版とe-book版があります。扱いたいテーマや言語活動に応じてさまざまなタイトルが用意されていますが、対象レベルや年齢なども示されており、「教科書＋α」で言語活動を実践したい時には、大変有効なアクティビティ集です。なかでも、私の気に入りは“Project Work”“Global Issues”“Drama and Improvisation”の3冊ですが、ねらいに応じて複数のアイデアを組み合わせれば、授業中の言語活動は無限に広がるものでしょう。生徒が楽しく英語を使いながら英語を学ぶチャンスを、私たち指導者は大切にしたいものです。「使って学ぶ」英語教育を皆さんで実践していきましょう！

2 『5分間トレーニングで英語力がぐんぐんアップ！ 中学生のためのすらすら英会話100』

瀧沢 広人（著）
明治図書出版 定価（本体2,060円＋税）
2013年8月20日刊行



山口県 山口市立大殿中学校
中沢 純子 先生

生徒が楽しく英語力を身に付けることを願って探し、たどり着いた本です。40種類以上のワークシートにはそれぞれ13文程度の質問と答えが書いてあり、ペアでジャンケンの勝者が質問、敗者が答えを担当して音読していきます。40秒ごとに一斉に移動し、相手をどんどん替えて練習します。1つのワークシートを7回の授業で継続して使い、回数を追うごとに難易度を上げていきます。例えば、「英語を見ながら言う→日本語を見ながら言う→ワークシートを見ずに言う→実生活に基づいて答える→答えを2文で言う→相手の答えに相づちを打つ」などです。生徒の実態に応じてやり方や英文の内容をいろいろ工夫できますし、どの生徒も生き生きと活動することができます。

Present!

本コーナーでご紹介した書籍を読者の皆様へプレゼントいたします。

ご希望の書籍の番号と下記の必要事項をご記入のうえ、FAXまたはEメールにて、『英語情報』編集部までご応募ください。

- ① 氏名 ② 所属（勤務校名）・役職 ③ 連絡先（住所、電話番号、メールアドレス） ④ ご希望の書籍番号
⑤ 今号で興味深かった記事とその理由 ⑥ 今後、本誌で取り上げてほしい内容や意見

抽選で各1名様にご希望の書籍を差し上げます。皆様からのご応募をお待ちしております。

応募締切

2016年9月30日（金）

応募方法



03-5439-6879



eigojoho@morecolor.com

※当選者の発表は商品の発送をもって代えさせていただきます。応募時に記載していただいた個人情報は、本件以外の目的には使用いたしません。

Super Global High School

正解のないグローバルな課題を
解決する手だてを考えられる人を育てる



第8回 早稲田大学高等学院

全生徒推進型でSGH研究を行い グローバルリーダーを育てる

卒業生全員に早稲田大学進学への道が約束されている早稲田大学高等学院は、受験勉強に捉われることなく、学院独自のカリキュラムを構築する幅の広さを持つ高校だ。大きな特徴は、SGH研究開発を全生徒推進型で実施していること。多彩なSGHメニューを取り揃え、グローバルリーダーの育成に生かしている。



SGH多文化共生学習プロジェクトの様子

多文化の中で主張し、責任を持って 活躍できる人物の育成を目指す

早稲田大学高等学院が目指す「グローバルリーダー」は、特別な人物という意味ではなく、「多文化社会のなかで、自己の主張をしながら集団的意思決定に関与しつつも、その結果に関わらずその集団に継続的に関与し続ける態度をもつ人物」と位置付けられている。それは「自己の主張をする責任ある人物」であり、同時に「多文化社会において異なる意見を持つ他者と共生しようとする、平和的秩序の愛好家」であるとする。

それを受けて、SGHの課題研究テーマを「多文化共生空間の創造・維持・発展」とし、さまざまなメニューを通して生徒たちに「どうすれば、学院が考える“グローバルリーダー”としての態度

を身に付けられるのか?」を問い掛ける。学院はその回答を「“恒常的に多文化”の社会において、“集団的意思決定を繰り返していく”ことでしか、手に入ることはできない」と説いている。それらを実現するチャンスとして、生徒には「外国人と学ぶ」「大学と学ぶ」「地域社会と学ぶ」「企業・NGOと学ぶ」「教養を学ぶ」という5つの機会が与えられ、より深い知見を獲得していく。

早稲田大学のビジョンと学院の目指す 方向性がSGHの内容と合致していた

そうした目標を持つ学院がSGHに手を挙げた理由は大きく2つあったという。1つは早稲田大学の動き、もう1つは時代の動きだ。山西廣司学院長は「2032年に創立150年を迎えるにあたり早稲田大学では“WASEDA

VISION 150”を掲げ、世界で競争していける大学へと、戦略を立てて取り組んでいます。私たちは大学全体の1セクションとして、どのような『新しい時代の中等教育』を提案できるのか、問われるタイミングにありました。そして、“グローバル化”や“少子高齢化”などが社会問題となるなかで、『多文化共生に向けて、日本の政策は今後どうあるべきか』など、近い将来の課題を生徒とともに考え、彼らの今後の生き方につなげてほしい、と強く思っていました」と語る。そうした動き・思いを持っているとき、タイミングよくSGHの機会が到来したという。山西学院長は「文部科学省のSGHの提案内容と、学院の方向性が合致していました」と加えた。

また、学院は創立時から“国際化”を強く意識しており、生徒全員が第二外

国語を学ぶ。さらに、生徒の自主的活動が盛んな校風でもあるため、約10年前から部活動とは別に「プロジェクト」という有志の、自主的な活動が行われている。これまでに「国際交流プロジェクト」や「環境問題プロジェクト」、「模擬裁判プロジェクト」などがあり、その時の生徒が興味を持った事項を活動に移せる仕組みがある。さらに、各教科・各行事が単発ではなく、有機的に連動して大きな目標を達成しようとする雰囲気、高等学院の根底には流れている。つまり、SGHのメニューとなっているプロジェクトのいくつかは、すでに定着しているカリキュラムでもあったのだ。そのため教員も生徒も、SGHのメニューを取り入れやすい環境にあった。

全員参加型SGHを支える教員の努力と 多彩で、魅力的な企画メニュー

学院のSGHの特長の1つは“全員参加型”という点だ。ある一部の生徒のためだけのメニューではない。生徒担当教務主任で数学・情報科の武沢護先生は、「SGHメニューに、生徒たちはフレキシブルに参加できます。これは、まさに本学院の特長だと思います。私たちは『とにかく全員に、この環境やチャンスを生かしてほしい』と考えています。部活動も盛んなので、時間的な

余裕がないと感じて一步を踏み出せない生徒も多数います。ですから教員は、『SGHの環境を生かそう』というメッセージをどんどん発信していますし、それを続けることが非常に大事だと考えています」と、熱く語った。

SGH「5つの機会」に紐づくメニューを見てみると、授業では、1年次に、独仏露中の第二外国語や、情報・英語・倫理といった必修科目で「多文化理解」の導入を行い、2年次は、総合的な学習の時間で「練馬区における国際社会」などをテーマに問題発見・課題解決型の学習を行う。3年次は、「異文化との共生を目指して」をテーマに「第二外国語横断プロジェクト」を行っている。

課外活動としては、オーストラリアやドイツ、対馬や沖縄でフィールドワークを行う「多文化共生学習SGHプロジェクト」や、企業・NGOと連携したプロジェクト、早稲田大学のさまざまな機関と連携した活動を行っている。

そして、教材に関しては早稲田大学のラーニングマネジメントシステムに独自のオンデマンドコンテンツを載せるという教材作成に取り組んでいる。これは、生徒に加え、学院入学予定者の入学前教育にも活用されている。現在のコンテンツは14テーマで、約10～20分、教員が「多文化共生学習」への予備知識を、

それぞれの科目の視点から伝えている。公民科の後藤潤平先生は「ネット環境さえあれば、生徒はいつでも視聴できますから、総合学習をはじめ多数の教員が関わる授業で展開するなど、その可能性は広がると思います」と語る。また武沢先生も「早稲田大学も多くの講義をコンテンツとしてオープンにしているので、高等学院からも発信をしたいですね」と、今後の展望を語る。

グローバルリーダーとして 社会貢献・世界貢献に寄与してほしい

実際、SGHの活動を通して「生徒も先生も変わった」と、山西学院長は感じている。「『このプログラムをやりたい』『留学したい』と望む生徒は間違いなく増えています。生徒の意識が全体的に底上げされ、アクティビティに対して感度が高程度や低めだった生徒たちが動き始めるようになりました。また、教員たちも変化していますね。例えば、『語学を教える』というより、『語学を使って、どのアクティビティを行うか』という視点に変わってきたように感じます。このような動きが出てくると、やはり全体が変化していきます」。山西学院長は、「グローバルリーダーとして生徒たちが育ち、社会貢献・世界貢献できる人材になってほしい」と目を細めた。



学院長 山西 廣司 先生



生徒担当教務主任 数学・情報科 武沢 護 先生



公民科 後藤 潤平 先生



オーストラリアフィールドワークでの学習



沖縄フィールドワークにおけるインタビュー調査

世界中の課題を解決するために 研究・教育の両面で貢献できる大学へ

慶應義塾大学 國領 二郎 常任理事 (国際担当)

1858年の創立以来、160年近くにわたり日本の近代化を支えてきた慶應義塾大学。創立者である福澤諭吉が志した「前人未到の新しい分野に挑戦する」姿勢は、今も慶應義塾の精神として脈々と受け継がれている。スーパーグローバル大学創成支援事業 (SGU) の公募では、その精神を体現するかのように難関のトップ型に挑戦し、数少ない私学としてその栄誉を勝ち取った。ここから始まる“陸の王者・慶應”の国際化に向けた新たな挑戦について伺った。

実学で世界の課題を解決し 持続可能性を高めるために

「今回のSGU公募は、いろいろな意味で大学のあり方を考えるよいチャンスになりました」。慶應義塾の国際担当である國領二郎常任理事は、そう切り出した。「慶應義塾には、創立者・福澤諭吉が提唱した『自我作古』（我よりいにしえをなす）という言葉があります。これは、前人未到の新しい分野に挑戦し、たとえ困難や試練が待ち受けていても、それに耐えて開拓にあたることを意味します。SGUの応募にあたって学内で議論を重ねた結果、すでに世の中で研究されてしまったことを学生に教えるティーチングスクールではなく、研究面でもリードできるような学塾でありたいという結論に至りました。そこで世界トップ100大学を目指すトップ型に挑戦することに決定したのです」

そうした考えから出てきたのが、SGU構想の骨子である「『実学（サイエンス）』によって地球社会の持続可能性を高める」というテーマだ。福澤諭吉はscienceの訳として「実学」という言葉を当てていたという。先人の教えを守るだけではなく、現実社会に照らし

て課題を洗い出し、それを検証しながら解決していく。物事を自分の目で見て自分の頭で考え、判断していく姿勢が西洋の繁栄をもたらした。それこそが「実学」であるという考え方が、大学の国際化に向けたSGU構想の随所に表れている。

学際的な教育や研究を通じて 国際社会へ貢献する

慶應義塾大学では、世界に存在するさまざまな課題の中で人類にとって最大のテーマは持続可能性を高めることだと考えている。SGU構想で、解決すべき課題として中心に据えているのが「長寿」「安全」「創造」という3つの「文理融合クラスター」だ。

「世の中の課題は非常に複合的にできています。そういう課題を解決するためには、経済学や医学といった学問分野別の取り組みだけでは足りません。まず問題領域があって、それに対して各専門分野が協力しながら解決にあたって発信していくことが必要です。そこから出てきたのがクラスターという考え方です」と國領常任理事は語る。

例えば「長寿」クラスターには、医

学部の守備範囲であるヘルスサイエンスだけでなく長寿社会がもたらす課題（人口家族研究、高齢者の雇用・就業、社会保障・財政研究）など社会科学の分野が含まれている。「安全」「創造」の各クラスターも同様に、文理が融合し、高度で学際的・国際的な教育や研究を通じて国際社会への貢献を目指しているという。同学がSGU構想で進めようとしている国際化の推進や教育の多様性などの取り組みは、全てこれらのクラスターを踏まえたものだ。

英語だけで入学し 卒業できる環境の整備を目指す

慶應義塾大学では、SGU挑戦の前からもさまざまな面で国際化に取り組んできたが、採択を機にどんなことが変わったのだろうか。國領常任理事はこう説明する。

「世の中では大学の国際化への取り組みとして、例えば国際教養学部といった学部の設置がトレンドになっています。確かに新設学部を作って外国人教員を集めれば一定の効果はあるかもしれませんが、それでは大学全体をグローバル化することにはなりません。

本学では今後10年かけて、英語で入学して英語で卒業できる環境をつくろうとしています」

その環境づくりの1つが、Global Interdisciplinary Courses (GIC) の設置だ。これは、全ての学部・研究科の学生が履修可能な共通外国語プログラムで、全学部の連携により外国語による総合教育科目を有機的に提供し、海外からの留学生と日本人学生が、国境と学部・研究科の枠を超えて机を並べて学び合うものだ。

「現在、GICとして英語で受けられる授業は約470あります。実は湘南藤沢キャンパス以外の学部1、2年生が学ぶ日吉キャンパスでは、昔から学部横断的に英語の科目を設置していました。その他のキャンパスでも英語のコースが増えることで、4年間にわたって英語の授業が受けられることになります。最終的には全ての学部で、英語だけで卒業に必要な単位が取れるような体制にしたいと考えています」

世界最高水準の研究者を招く クロスアポイントメント制度

もう1つ、SGU採択をきっかけに大き

く前進したのが教員組織の国際化だ。その中で目玉とも言える取り組みとして「クロスアポイントメント制度の導入」がある。これは海外から副指導教授を招く制度で、特に大学院教育の国際化を目指すものだ。

「この制度は、それぞれの学問領域で世界最高水準の研究者を招き、大学院生の指導にあたっていただくというものです。多様な分野で活躍する海外の研究者に大学院の授業や個別指導を担当していただくなど、形式はさまざまです」

実際に海外から招いた一流の研究者は、今年1月時点で延べ110名。その後も増え続けているため、この夏には150名以上に上るといふ。「対象となるのは博士課程が中心です。今まで日本語でしか論文を書いたことがない者もこれからは英語で書かなければならなくなります。また、すでに英語で論文を発表していた者たちもグローバルな基準で評価されることになるため、今までとは緊張感が違います。これの成果が出るのに10年くらいはかかるだろうと予想していますが、学内で世界レベルの研究がより進んでいくはずですよ」と國領常任理事は期待を寄せる。

グローバルな場面で

リーダーシップを取れる人材の育成

SGU採択から2年あまり経った現在、取り組みの成果は少しずつ表れ始めている。慶應義塾大学では、以前から海外教育機関との協定や交換留学に力を入れていたが、採択を機に、ダブルディグリープログラムは23から26へ、交換留学等の協定は当初の267から300を超すまでとなった。

「構想に掲げた数値目標を達成することは重要ですが、それだけでなく、今後は『サイエンスの力で世界の課題を解決する有力なプレーヤーを育てていく』という基本を常に再確認しながら取り組みを進めていきます。SGUは大学の国際化事業ですが、慶應義塾は大学だけでなく、小学校、中学校、高校を持っていることが特徴であり強みであると考えています。例えば小・中学校では、海外の学校を訪問したり、高校から派遣留学のプログラムを設定したりするなど、以前から国際化に向けて力を入れてきました。SGU採択を機に、それをもっと強化していく動きが出てきています」と國領常任理事は自信を見せる。

「本学では、全ての学生が学部卒業段階で自分の研究について外国語で発表できる能力を身に付けさせることを構想の目標に掲げています。卒業した後も自分の頭で考え、グローバルなチームの中でリーダーシップを取れる人材になるために、問題意識と独立自尊の精神を持った学生に入ってきてほしいですね」

研究・教育の両面で世界の課題を解決するという目標を掲げる慶應義塾大学。10年後、20年後には、その成果がきっと大きな実を結ぶことだろう。

スーパーグローバル大学 (SGU)

Top Global University

大学の国際化が進めば
大学入試や高校教育も変わっていく

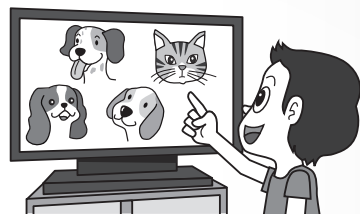
〔連載〕

思考力・判断力・表現力を育む

ライティング活動のために 第2回

Writing

2020年から次期学習指導要領の改訂や新テストの実施を控え、生徒が自分の言葉で自分の考えを発信する力を高める指導が求められています。4技能を統合した言語活動により、どのようにライティング活動へ結び付けるのか、また、生徒が書いたものをどのように評価すればよいのか。大井恭子先生が「効果的な指導と評価の方法」についてアドバイスを送ります。



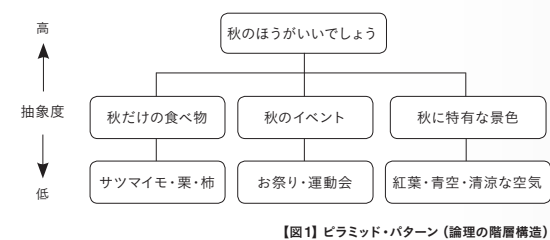
私が子育てをしながら米国で大学院生生活を送っていたとき、頼りにしていたのがTV番組のSesame Streetである。息子は夢中になって見ていて、しばし私に休息の時間が与えられていた。日本でも放映されていたので、皆さんにもなじみがあるかと思う。そのとき、毎回決まって出てきた、“One of these things is not like the others. One of these things just doesn't belong.”というフレーズがあった。当時はなぜ毎回幼児にこのような認知訓練が必要なのかといぶかしく思っていた。それが作文教育をするようになって、こうした「分類(classification)」の概念が英語の文章を作るうえで重要であると、遅まきながら理解することができた。

つまり、英語という言葉では情報をまとめるうえで「分類」こそが必須である。世の中にあるさまざまな情報をまとめる鍵となるのは、それらがどのような概念によって構成されているかということなのである。

例えば、よく出されるライティング課題として、「海外の友人から日本を訪問するのは春と秋ではどちらのほうがよいでしょうかと尋ねられたとき、あなたならどのように答えますか」などがある。そのとき、まずアイデアを産み出すために、マッピングとして、バブルを書いて考えを発展させていく、という手法がとられることが多い。アイデアを自由に出すという点で、マッピングは有効な手段かもしれない。しかし、アイデアが拡散すればよいというものではない。必要なのは、概念同士の関係をつかみ、同じものはグループ化し、上位概念と下位概念を整理するという「分類整理」というステップである。

つまり、「秋のほうがよいのは、栗や柿が食べられるし、運動会もあるし、紅葉がきれいだし」という個々のアイデアを、「分類」の概念を使って、同じものは1つのグループに入れ、そしてそれぞれの構成要素の上位概

念としてのラベルを用意するという作業である。そういう意味で、私はマッピングよりは、「ピラミッド・パターン」【図1】で示したほうが、そののちの文章構成を考えるうえで役立つと考える。つまり、第二層にあるものが、秋のほうを勧める理由であり、第三層にあるのが、それぞれの具体例である。そこには、抽象度の階層がある。アイデア・ジェネレーションとして、さまざまなアイデアをマッピングを使って出したとしても、それを「概念整理」というステップが重要で、それに寄与するのが「分類」の思考力である。



【図1】ピラミッド・パターン（論理の階層構造）

こうした分類整理を経て出来上がった文章としては次のようなものになる。上のピラミッド・パターンと合わせて、文章の中の階層性に注目してほしい。

You should visit Japan in fall. First, there are so many delicious foods in fall. For example, you can enjoy sweet potatoes, chestnuts and persimmons only in fall. Second, you can enjoy some open-air activities in fall, such as a fall festival and a field day. Third, you can see beautiful scenery everywhere in fall. The leaves turn yellow, the sky is blue, and the air seems clearer. In conclusion, you should consider coming to Japan in fall.

— topic sentence
----- supporting sentences
~~~~~ concluding sentence



大井 恭子 (おおい・きょうこ)

清泉女子大学文学部英語英文学科教授。東京大学文学部英語英文学科卒、New York 州立大学Stony Brook 校大学院言語学科博士課程修了。博士（外国語教授法）。専門は英語教育、応用言語学。特にライティング能力の習得に関し、認知面と文化的背景という観点から外国語としての英語のライティング教育の構築を目指している。

〔連載〕

柴原智幸先生の

## プレゼンテーション講座

第2回

### 「プレゼンテーションの構成を理解させる」

道を歩いていたら、前から歩いてきた人にいきなり平手打ちされました。「な、何するんですか!」頬を押さえながらそう言いますよね。相手が何を言うかは分かりませんが、それに耳を傾ける気は満々なはずです。まあ、その前に渾身の右ストレートを繰り出す方もいらっしゃるかもしれませんが……。

それはともかく、プレゼンテーションには大きく「導入」「展開」「結論」の3つの段階があり、導入部分でいかに聞き手を引き込むかが決め手になってきます。

そこでちょっと乱暴な例えで恐縮ですが、冒頭のお話をしたわけです。聞き手の耳をこちらに向けた状態で、主張を伝えねば、何も伝わりませんから。

#### 聞き手の注意をひきつける効果的な方法は?

さて、聞き手の注意をひきつけるには「衝撃」「笑い」「質問」などが効果的です。

「衝撃」というのは、例えば冒頭の平手打ちのようなもので、聞き手にショックを与えるようなメッセージをぶつけるタイプです。「今までの英語勉強法は、全て間違いだった!」などというのが典型例で、聞き手は「え!? そうだったんですか?」とこちらに耳を傾けてくれます。

または「笑い」を使うこともできます。私は、授業でシャドウイングに取り組む前に、(恐らく)わざと下手な発音でシャドウイングに取り組む人を撮影した動画\*を見せます。ひとしきりみんなで笑った後、「あれじゃ、もったいないよね。きちんとした発音で取り組まないと。だからちょっと時間を取って、発音の練習をしようか」という指導へと展開するわけです。

「質問」から切り出すのも、効果的です。先日、大学の教職課程ガイダンスでお話した時には、「はい、では全員立ち上がって! 2人一組、ペアを作って、じゃんけんをしてください。それが終わったらペア同士で着席。……では、ここで皆さんにお聞きします。英語教員として、どんなことを目指したらよいと思いますか? あえて抽象的な質問にしています。30秒あげますので、ペアの人と話し合ってください。あとで、勝った人に、どんなことを話し合ったかを聞きますよ」

という形でスタートしました。いろいろな意見を出してもらった後、「模範解答というわけではありませんが、私が考えているのは……」と切り出すと、一生懸命耳を傾けてもらえたようです。

#### 情報をテンポよく伝えて主張する

さて、「導入」がうまくいったら次は「展開」ですが、ここは自分の主張を、  
・大きな情報→小さな情報  
・抽象的なもの→具体的なもの  
という順序で伝えて行きます。この際、情報の受け手が情報を飲み込んだタイミングで、次の情報をテンポよく伝えるとうまく行くことが多いようです。

気を付けるべきなのは情報過多ですね。通訳者の立場から言うと、プレゼンテーションの際、使用するパワーポイントの画面が文字で埋め尽くされていると、情報量が多すぎて大変です。そういう意味では、同時通訳者が大変そうかどうかは、情報量のバロメーターになるかもしれません!

「導入」「展開」がうまくいったら、「結論」は「導入部分の主張」をもう一度繰り返して「ダメ押し」をすれば、聞き手にメッセージが伝わりやすいですよ。

理屈が分かったら、あとは実践あるのみです。いろいろなことを伝えて、経験を積んでいきましょう!

\* [https://www.youtube.com/watch?v=TwlaG\\_rOoaM](https://www.youtube.com/watch?v=TwlaG_rOoaM)

柴原 智幸 (しばはら・ともゆき)

神田外語大学外国語学部英米語学科専任講師。同時通訳者。NHKラジオ『攻略! 英語リスニング』講師。上智大学外国語学部英語学科卒。イギリス・バース大学の通訳翻訳コース修士課程修了後、ロンドンのBBCに入社。帰国後はNHKの放送通訳や「ディスカバリーチャンネル」などの吹き替え用映像翻訳、通訳養成学校での指導を行う。主な著書に『攻略! 英語リスニング 徹底シャドウイングでマスター! 長文リスニング』(NHK出版)、『オバマの英語 徹底トレーニングブック』(アルク)など。



# Game & Activity

## 英語を使うことが楽しくなる歌やゲーム ～絵本『Walking through the Jungle』をベースに～

歌やチャンツは、リズムに乗っているうちに自然に英語が体の中に入ってきます。  
リピートの多いものや、子供たちがワクワク・ドキドキできる物語性があると、  
英語を使うことが、より楽しくなります。  
最初からきちんとと言えることを目指すのではなく、  
まずはリズムが体感できるように活動を進めていきましょう。  
何度かクラスで取り上げていくうちに言えるようになってきます。

MASUMI先生の  
紹介したゲームが  
見られます



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。  
(アプリの詳細は表紙の裏面へ)

## 1 まずばチャンツを覚えよう!

体全体を動かしながら覚えるのが一番です。なかでも一番単純で楽しいのが、  
皆さんよくご存知の“花いちもんめ”スタイルです。  
子供たちを2列に並べ、お互いに向き合った状態で言い合います。



Walking through the jungle,  
Walking through the jungle,  
What do you see?  
What do you see?

Enjoy!



## 2 この鳴き声は何?

動物の鳴き声は英語と日本語では表現が違います。

Lion = roar Frog = ribbit, ribbit Duck = quack, quack  
Pig = oink, oink Horse = neigh

呼びかけ例

- A: Ribbit, ribbit. What is it?  
B: Is it a rabbit?  
A: No, it isn't.  
B: Is it a frog?  
A: Yes, it is.

ブタの鳴き声が oink, 馬が neigh と英語では表現されるんだと知ったとき、皆さんにとっても驚きではなかったでしょうか? 「ほかの動物は英語ではどんな風に表現されるんだろう?」と子供たちが興味を持ってくれたら、また別の角度から英語学習への意欲が湧いてきます。

## 3

### みんなでまねっこゲーム

1のチャンツを“花いちもんめ”スタイルで言い合いながら

What do you see?

What do you see?

の後、片方の列が全員で同じ動物を表現します。

例えば、ライオンになりみんなで鳴き声を表現してみます。

相手チームは“Is it a lion?”のように質問していきます。

映像の中では1年生などが混じっていて既存のクラスでないため個々で動物を表現していますが、学年が高ければみんなですべての動物を作るとより楽しいです。みんなで協力し、短時間でライオンになったりゴリラになったりします。このようにみんなで一緒に何か1つのものを表現するという作業を入れておくと、劇づくりをする時などに役立ちます。



### みんなでジャングルにでかけよう!

映像を参考に、動きをつけながらみんなでチャンツを言います。

先生が後ろから声を出して、ライオン以外の動物だったら大丈夫。

ジャングル探検をそのまま続けますが、ライオンの声が聞こえてきたら、一斉に急いで逃げます!

安全地帯にタッチすれば助かります。捕まってしまったら…食べられちゃうかも?!

Walking through the jungle,  
Walking through the jungle,  
What do you see?

What do you see?

Look to the right. Look to the left.

Look up. Look down. Look straight.

What is it? (双眼鏡で動物を見る真似をする)

走る距離を長くしたり、無秩序に走ったりすると危険です。あらかじめルールを決めて、途中で誰かがケガをしてせっかくのドキドキ・ワクワクが消えてしまわないよう、クラスマネージメントをしっかりしましょう。

このチャンツは『Walking through the Jungle (by Debbie Harter)』の絵本を参考にして  
います。私は初めてこの絵本を手にしたとき、リズムの心地よさと絵の面白さに惚れ込みました。  
絵本の中では“Climbing in the mountain”, “Swimming in the river”などいろいろな表現  
が出てきます。時間があれば子供たちと一緒に絵本の世界に入り込んで、いろいろな表現をイン  
プットしてみてください。講師が想像するより早く、子供たちが絵本とリズムの力によってチャン  
ツを口ずさみ始めるのに驚くことでしょう。英語はリズムです。体をいっぱい使って英語のリズム  
感を体感させるクラス展開を心掛けましょう。



小口 真澄 (こぐち・ますみ)

“夢中になるから英語が話せる”英語芸術学校 MARBLES 主宰。聖セシリア女子中学校講師、新潟県魚沼市主催「魚沼産☆夢ひかり」キッズミュージカルプロジェクト」演出。全国の小学校にて英語劇ワークショップ「英語 DE ドラマ@学校」を行う。企業研修に英語劇を取り入れビジネスマンたちとも英語ミュージカルを創る。





# 「徳島ならではの」の教育で 未来に羽ばたくグローバル「人財」を育成

第7回 徳島県立総合教育センター  
岩崎 洋 所長×橋本 隆 次長  
学校経営支援課、教職員研修課のみなさん

徳島県は、2015年12月に策定した「徳島教育大綱」において「とくしまの未来を切り拓く、夢あふれる『人財』の育成」をテーマに掲げている。その鍵を握るのが、「徳島ならではの」教育であり、地域の宝である「人財」の育成だ。グローバルな視点とローカルな視点を兼ね備えた人財をいかに育てているのか。小・中・高校生のための取り組みや教員研修などについて、徳島県立総合教育センターの皆さんに語っていただいた。（文中敬称略）



## グローバル人材育成のために

**岩崎** 徳島県では、2015年12月の総合教育会議において、「徳島教育大綱」が策定されました。これは、徳島の教育力を結集させて、創意工夫を凝らした教育を実践することを目的とするものです。現在、「とくしまの未来を切り拓く、夢あふれる『人財』の育成」という基本方針のもとで、困難にぶつかっても、挑戦し続け、未来を切り拓いていく、本県の宝である「人財」の育成を目指しています。その重点項目の中に、「世界に羽ばたくグローバル人財の育成」があり、グローバルな視点とローカルな視点を兼ね備えた、徳島県独自のグローバル人財の育成を目指しています。現在、本県では未来に羽ばたく人財の育成を目指し、県が一丸となって取り組んでいるという状況です。

**橋本** 「徳島教育大綱」の行動計画として、「徳島県教育振興計画（第2期）～阿波っ子みらい教育プラン～」があ

ります。これは、本県の教育振興のための具体的な施策や成果目標を示したものです。その基本方針に、「グローバル化に対応した教育の推進」とありますが、その施策として特に、「外国語（英語）教育・国際理解教育・国際交流の推進」が挙げられています。今日はこのプランのもと、徳島県で行われている英語教育や関連事業についてお話しさせていただきます。

**寺澤** まず、教育委員会が2016年3月に策定した5カ年計画の「徳島県英語教育改善プラン」は、本県の英語教育が目指すべき方向性と、今後推進すべき取り組み等の指針を示したものです。策定にあたり、前述の2つの施策ならびに全国調査の「英語教育実施状況調査」と、県独自調査の「生徒及び英語担当教員アンケート結果」を参考にしました。そして、大学教授、民間の方々、中・高の校長先生方、県教育委員会のメンバーから構成される検討委員会で

協議を重ねてきました。本県の英語教育における課題と今後の重点施策としては、次の3点が挙げられます。1点目が「CAN-DOリスト」を活用した指導のPDCAサイクルの構築です。2点目は教員研修のさらなる充実に取り組むことです。そして3点目は、児童生徒の「生きた英語」に触れる機会を拡充させることです。また、生徒や教員の英語力の向上など、いくつかの数値目標が示されています。この数値目標の達成に向け、本県の英語教育に関わる全ての人の力を集めていくことが、私たち教育委員会の仕事だと思っています。

**「徳島ならではの」のさまざまな取り組み**  
**寺澤** 「徳島県英語教育改善プラン」における生徒や学校を対象とした事業には次の5つがあります。① Tokushima 英語村プロジェクト・ステップアップ事業、②留学促進事業、③徳島グローバルスタンダード人材育成事業、④徳島

県高校生英語力検証事業、⑤スーパーグローバルハイスクール——です。なかでも、「徳島ならではの」取り組みと言えるのが、① Tokushima 英語村プロジェクト・ステップアップ事業です。小学校5、6年生を対象とするデイキャンプ事業、中学生を対象とするイングリッシュ・キャンプ、そして、高校生を対象とする徳島サマースクールや「ジュニア観光ガイド」養成講座があります。いずれも、生きた英語を使う機会を設け、徐々にその日数や機会が広がることを目指しています。また、②留学促進事業では、県独自の制度として、県立中学校の海外語学研修支援事業を設け、生徒1人当たり10万円を補助しています。④徳島県高校生英語力検証事業では、英検IBAを活用して、県内全ての高校1年生の英語力を検証しています。今年度は高校2年生を対象として実施することを検討しています。  
**上萩** 教員対象の研修および支援とし

ては、徳島県では以前から英語科教員に対する県独自の特別研修を継続してきました。2003～2007年度は、「英語教育研修講座」を行いました。これは「英語が使える日本人」育成のための戦略構想に基づく、海外研修・ブロック別指導者講座参加者を除く中・高<sup>上</sup>悉皆研修です。2008～2010年度は、学習指導要領改訂に備えて全校種の教員を対象とした「小中高英語教育連携講座」を実施しました。そして、2011～2013年度は、学習指導要領の理念の徹底と授業の充実を目的とし、全小・中・高を対象とする「小中高英語教育実践講座」を行いました。現在は、国の「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」の委託を受け、これまでの研修の流れを引き継ぐ、「小中高英語パワーアップ講座」を中心に、さまざまな研修を提供しています。  
**小川** 研修の際は、常に「校種間の連携」を意識した内容を提供するように

しています。「小中高英語パワーアップ講座」の初日は、小・中・高の全校種が一堂に会する全体研修です。そのなかで、小・中・高の先生方が一緒になるようなグループ分けをし、各校種における取り組みと課題を話し合う時間を設けています。その協議の時間は、異なる校種でどのように学んでいるかを知るだけでなく、小学校の教員にとっては、小学校で育成すべき力について考える機会となります。また、中学校の教員にとっては、英語教育入門期における小・中のスムーズな接続のためにどのように授業を組み立てるかを考える場となり、高校の教員にとっては、中学校と高等学校の学びの系統性を確認する場ともなっているようです。「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」でも、小・中・高の三校種の研修協力校を設定し、授業参観や校内研修に参加し合う機会を作っています。  
**片山** 教員研修のほかにも、当セン



ターでは指導主事が中心となり、「土曜セミナー」を実施しています。これは主に、指導力向上を目的とするもので、本年度は、アクティブ・ラーニングをテーマにしています。また、カリキュラムサポートセンターでは、指導案の書き方や各地の教育機関の研究紀要など、日々の教育活動や授業づくりに役立つ資料を提供しています。さらに、学力向上に関する資料として、「教員のための授業の手引『阿波っ子のみらい』」や「とくしま授業技術の基礎・基本」などを当センターのホームページで随時公開し、ダウンロードできるようにしています。「とくしま授業技術の基礎・基本」は主に若い先生方に向けた授業力向上のためのテキストです。

#### 見えてきた成果と課題、 そして課題解決のために

**橋本** このように、さまざまな取り組みを行うなかで、小学校では国の動向を注視し、研修内容に「社会の変化を見据えた一歩先に行く英語教育」を継続的に反映させてきた結果、学習指導要領の理念がスムーズに浸透しました。県内では、学級担任主導による外国語活動が展開され、先生方の研修への熱意も非常に高いと、研修の講師の方々

から好評を得ています。一方で課題としては、外国語活動に全校で取り組む体制づくりや、ALTや英語専任講師の活用、小学校教員の英語力の向上などが挙げられます。

**小川** 中学校では、早くから「CAN-DOリスト」の作成に取り組み、2014年度末には全ての中学校で整備されました。その結果、指導と評価の一体化が進み、パフォーマンステストの実施率も高く、4技能をバランスよく評価することができています。中学校の現場では、パフォーマンステストに向けて、生徒が休み時間に、スピーチや音読を熱心に練習している姿が見受けられますし、パフォーマンステストが定着しているという印象です。その一方で、言語活動のより一層の充実にも努めながら、その活動を通していかに技能の定着を図るかということや、次期学習指導要領の内容を見越して、英語で授業を行うことへの準備を進めていくことが課題であると言えるでしょう。高等学校はいかがですか？

**片山** 小・中学校に比べると、研修や授業公開の機会が少ないため、悉皆研修だけでなく希望制の研究会やセミナーも数多く開催し、最新の指導技術を学ぶことができる機会を提供してい

ます。現行の学習指導要領実施から3年以上が経ちましたが、行き詰まりを感じたり、改善案を求めたりする教員は数多くいます。そうした教員をサポートできるよう、当センターでは研修の内容を常に工夫しています。研修が毎日の授業実践に役立ったという声を多く聞いています。課題としては、生徒の言語活動の時間を増やし、パフォーマンステストの充実を図るなど、4技能をバランスよく伸ばし、評価する取り組みをさらに進めることが求められています。

**上萩** 各校種が抱える課題をいかに解決するかについては、まず小学校では、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを1つの目安とし、次期学習指導要領の内容も見据えた研修内容を提供していかなければならないと考えています。そのためには受講者の増員、教室英語やALTとの打合せに必要な英会話研修、歌や絵本の活用などを進めていきます。また、中学校では小・中連携を意識した授業の実践により、小学校での学びを高める授業づくりや、授業公開や研修により他校の成功例を共有していきたいと思っています。

**寺澤** 高等学校では、集合研修の機会が多くないので、個々の教員の自己研鑽に委ねがちです。校内でのサポー



ト体制がある学校はよいのですが、小規模校では校内に英語の先生が1名という場合も多々あります。そこで、研修を通して、他校の先生との情報交換ができる関係を築き、一人で課題を抱え込まないようにするというのを重視しています。また、パフォーマンステストなどの成功例を積極的に集め、共有してもらうほか、カリキュラムサポートセンターで映像や音声データを蓄積して公開し、いつでも知りたいときに資料を閲覧、視聴できるようにしていきたいですね。指導力向上のためには、映像で他の先生の授業を見ることも大切ですので、いろいろな実践事例に触れることを勧めていきたいと思っています。

#### 「宝」である子供たちを しっかりと育てていく

**岩崎** 当センターは県の中央に位置しており、県下の教員が日帰りで集まり研修を受けられるという地理的条件に

恵まれています。そのため、全校・全教員が共通理解を図りつつ、同一步調で取り組みを進めることができます。これは、本県の大きな強みと言えるでしょう。本年度は、早急に「徳島県英語教育改善プラン」を浸透させるべく周知徹底に努め、達成目標の実現に向けた取り組みを強化していきたいと考えています。本県の強みである全校・全教員の「共通理解」を生かし、その上にこれまでの研修の実績、今日お話しさせていただいた、さまざまな事業の運営に見られるような推進力、そして教員の熱意を結集すれば、「徳島ならではの」未来に羽ばたくグローバル「人財」の育成、という大きな目標を必ず実現できると信じています。

**寺澤** 徳島の子供たちが大人になってどのようにグローバル、グローカルに関わるか。それは、人によって時期や目的も違うと思います。生涯、学び続けることができる、いつでも英語をやり直せる、人生のどこのステージで英語や異

文化と触れ合うことがあったとしても、新たに自分の力を伸ばしていけるという、長期的な視点に立った教育の中で子供たちを育てていきたいと思います。

**上萩** そうですね。徳島県には「お接待の精神」というお遍路文化があります。グローバルでありながら、自分が生まれ育った地域に誇りを持つことのできる、「徳島ならではの」子供たちを育てていきたいです。

**岩崎** 徳島県では少子化が進んでいます。だからこそ、地元を大切にしながら、なおかつグローバルな視点を持った子供たちを育てたいと思います。そのためにも、英語は大切なのです。「徳島教育大綱」で掲げているテーマ「とくしまの未来を切り拓く、夢あふれる『人財』の育成」では、人材の「材」の字を、財宝の「財」の字としています。人は宝であるということです。それが教育大綱の本質のところですから、教育を大切に、子供たちという宝をしっかりと育てていきます。

## 地元を大切にしながら、 グローバルな視点を持った 子供たちを育てていきたい

〈岩崎所長〉



特 別  
記 事

# イギリスの日本人学校から 日本の英語教育への提言

移りゆく時代とともに27年、ロンドンでグローバル人材を育成

イギリスの首都ロンドン郊外の緑豊かなバッキンガムシャー州に位置する「帝京ロンドン学園高等部」は、文部科学省の認定を受けて1989年に創設された、日本国外に居住する日本人のための一条校（学校教育法第1条に基づく教育施設）だ。創設の背景にはバブル景気における日本企業の盛んな海外進出があった。同学園は開校当時よりイギリス在住者以外の単身留学生の受け入れも積極的に行ってきたが、バブル崩壊後の現在、生徒の約6割が単身留学生である。その多くが、「国際的な環境で質の高い英語教育を受けさせたい」という保護者の期待と希望を背負って、日本からはるばるやって来るという。イギリスの歴史ある日本人学校から、これからの日本の英語教育のために学ぶべきことを探る。

## 帝京ロンドン学園高等部における 英語教育の枠組み

「ロンドンにある学校」と聞くと生徒の英語力が非常に高いイメージを持つかも知れない。だが、帝京ロンドン学園高等部の場合、入学時の生徒の英語力、そして言語のバックグラウンドには、相当の幅があるという。

「英語圏の現地校に通った経験のある生徒、保護者の赴任のため、英国だけでなく海外に居住している生徒、さらには北海道から九州まで日本全国から英語が苦手な生徒も集まります」と関根彰子先生は話す。

英語以外の教科の授業は日本語で行われるが、英語教育に注力しているため、英語科の授業数は週10時間と多い。そ

のうち2時間は日本人教師が英文法を中心に日本語で教えるが、これは「日本人にとって、英文法は日本語で学ぶほうが効率的で実践的」という考えに基づいている。そして、「英会話」や「英語演習」などは英国人の先生方が、日常会話からアカデミック・イングリッシュまでを網羅する。

卒業後はイギリスの大学に進学する生徒もいるが、多くの生徒は帰国し、日本の大学に進学する。そのため、日本の大学入試を意識した授業が行われており、生徒には「卒業時まで、英検準1級または2級を取得すること」が推奨されている。

つまり、同学園の英語教育には、英語環境に恵まれた海外に位置するという特別な側面と、日本人に特化した英語教育という、2つの側面があると言える。

「多感な思春期の3年間を本校で過ごし、考え学んだことがいずれ日本に戻り高

等教育での学業につながり、そして将来は日本を背負う人材になってもらいたいという思いでいます」と関根先生は願う。

## 知識と社会をつなぐ 体験型学習を重視

同学園はロンドンにあるとはいえ日本人学校であるため、日本語だけでも学校生活を送ることができてしまう。そこで「日本人村」になってしまわないよう、イギリスにあるという環境を生かした体験型学習を重視しているという。

例えば関根先生の受け持つ英国史の授業では、議会制制度を学んだ後にはロンドン中心部へ出かけ、国会議事堂を見学する。また、ロンドンの地下鉄で配布されている無料新聞やBBCニュースなどの生きた教材を活用し、「イギリスはEUから離脱するべきか否か」といった時事問題も日常的に取り上げる。

「机上だけではなく、英語を社会や体験と結び付けて学びます。それが生徒たちの知識を広げるだけではなく、ものを考える力を育むのです」

英国史だけではなく、体験学習には世界史、政治経済、美術などの各教科が連携し、全学的に取り組んでいる。

## 日常的に行われてきた アクティブ・ラーニング

イギリスは多民族国家であり、各自の



異なる文化や宗教的な立場から、一人一人の意見が求められる。主体的に物事を考え、発信する力を育む「アクティブ・ラーニング」はイギリスではいわば必須であり、関根先生も「意識はしていませんでしたが、これまで積極的に取り組んできたことは、必然的にアクティブ・ラーニングだったと思います」と振り返る。

例えば各教科の授業は、ディスカッションやプレゼンテーションで展開する。英会話の授業では、生徒が自分の意見を英語で発表することは、当たり前のように行われてきた。英国史の授業においても、教科書に沿って史実を読み上げるような、受け身の授業は行わない。

「例えば、『1066年、フランスの貴族がイギリスの王様になりました。もしあなたが王様なら、これから敵がたくさんいるところで、何をしたらよいでしょうか?』などと問い掛け、生徒に考えさせます」

ただし、日本で教育を受けてきた生徒は、こうした能動的な活動にすぐなじめるわけではないという。

「日本人の“横に並びたがる気質”もありますから、まずは意識変革が必要です。場数を踏んでいけば、生徒たちは飛躍的に変わっていきますね。その成果は授業だけでなく、生活にも現れてきます。例えばやりたい部活がなければ、生徒は自らクラブを作ったり、そのためにはどこにコンタクトを取ればよいか、どうしたらよいかを考え、自ら行動するようになります」と関根先生は生徒の成長を喜ぶ。

## 英語を話す必然性は 教師からプロデュース

英会話の授業では、日本語で話し始めてしまう生徒がいる。関根先生は、「英語を話さなければいけない必然性は、教師から生み出すことが大切」だと訴える。

「日本人にとっての英語は『外国語』。学習言語と日常言語のギャップが大きく、それを埋めるのが今の教育の課題です。そのためには、十分な時間と適切な学習が必要です。英語が『第二言語』として生活や教育現場で話されているインドやアフリカのような国とは異なる教育が必要です。『日本語禁止』『オール・イングリッシュ・デーを設ける』など、生徒にとって英語が話せないと心地悪い環境を用意し、緊張感を与えることもその1つです」

## 英語教育を変えるには まずは教師自身が変わる

関根先生自身も、かつては日本の公立学校で、古典的な文法訳読法で英語を教えていた。だが、留学と渡英をきっかけに、自ら英語教授法を抜本的に改革してきた。その背景には、「このままではこれ以上成長できない」という危機感、そして「英語教育を変えるのに最も大事なものは、教師自身が変わること」という、“気付き”を身をもって知ることができた。

「英語科の教員がいかにほかの仕事や生徒指導だけでも忙しいか、自分が受けてきた英語教育が最良のものと信じて疑わず『一国一城の主』になってしまいがちか、よく分かります。ただ、時代が変わっているのに、教育が変わらなくてよいなんてことはあり得ません。『縁あって親子』という言葉がありますが、縁があって生徒さんと出会い、大切な思春期と一緒に過ごします。人生のたった3年間だけです。親ではなく私たち英語教師だからこそ伝えられることがあります。それは教師としての義務でもあります」。関根先生は自らの経験から得た思いを語る。

そして、「自らのトレーニングをせずに、未来を担う生徒と向き合うことは許されません。他の先生の講演を聞きに行く。先生たちのネットワークに入る。インターネットで調べる。できることはたくさんあります。私もロンドンで、『英語情報』は毎月、隅々まで読み込んでいます。日本の英語教育を変えるために、自ら前進しましょう。そして学びを通し成長することを楽しみましょう」と読者に向けてメッセージを送った。



帝京ロンドン学園高等部 関根 彰子先生



# 平成27年度 実用英語技能検定 成績優秀者・優秀団体表彰式を開催

公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）は毎年度末に、実用英語技能検定（英検）の成績優秀者と優秀団体を表彰している。  
3月24日に、東京都港区のANAインターコンチネンタルホテル東京にて開催された表彰式には、  
平成27年度の第1回から第3回検定において、特に優秀な成績を収めた個人と団体が全国から集い、その努力と栄誉をたたえ合った。

## 各賞の選考基準が明らかに

英検協会では毎年、その年度中に実施した英検第1回～第3回検定の合格者の中から、特に優秀な成績を収めた個人と団体を表彰する制度を設けている。  
英検協会の松川孝一理事長によるあいさつで開会した、平成27年度の表彰式。まず、キャロライン・ケネディ駐日アメリカ合衆国大使による、受賞者をたたえるお祝いのビデオメッセージが流れ、受賞者たちの顔がほころんだ。さらに、グロービス経営大学院の堀義人学長も「英語力を身に付けると世界が広がります。世界における日本の存在感が低下しているこの時代に、今こそ、皆さんも英語力を付けて世界へ飛び立ってください

い」と、ビデオメッセージを寄せた。

そして、個人賞と団体賞の表彰へ移る。これまで、成績優秀者・優秀団体に贈られる各賞の選考基準は明らかにされていなかったが、今回より、その基準が示されることとなった（下表）。  
「生涯学習奨励賞（個人の部）」「米国大使賞（個人の部・団体の部）」「ブリティッシュ・カウンシル駐日代表賞（個人の部・団体の部）」「カナダ大使賞（個人の部・団体の部）」「オーストラリア大使賞（個人の部・団体の部）」「日本商工会議所会頭賞」「日本英語検定協会賞（個人の部・団体の部）」「文部科学大臣賞（団体の部）」と、それぞれの受賞者・団体の名前が呼ばれ、壇上で賞状や記念品の授

与が続くなか、会場が沸いたのは、「文部科学大臣賞（個人の部）」の発表だった。

## 「文部科学大臣賞（個人の部）」の発表に沸く会場

「文部科学大臣賞（個人の部）」の受賞者は、事前に発表されておらず、表彰式の場での発表となった。この賞は、すでに表彰されている「米国大使賞」「ブリティッシュ・カウンシル駐日代表賞」「カナダ大使賞」「オーストラリア大使賞」「日本商工会議所会頭賞」の受賞者の中から、最も英検CSEスコアが高かった方に贈られるものだ。ノミネートされている受賞者たちの名前が級ごとにスクリーンに映し出された。司会者に手渡された封筒には、



受賞者の名前が記された書面が入っている。会場には、緊張感が漂った。

いよいよ発表の瞬間。第1回から第3回の検定ごとに、各級1名ずつの受賞者の名前が読み上げられた。小学生から社会人まで幅広い世代の受賞者が壇上に並び、一人ずつ受賞の喜びを語る。そして、文部科学省 生涯学習政策局 生涯学習推進課 民間教育事業振興室の助川隆室長から、表彰状が手渡され、会場は大きな拍手で包まれた。

最後に、文部科学省の助川室長から、次のような祝辞が寄せられた。

「グローバル社会において、英語はツールでしかありません。しかし、ツールを持っている者は強いのです。ぜひ、これまで培ってきた英語の知識・技能を活用していただきたいと思います。2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックでは、外国から多くの方を迎えることとなります。通訳ボランティアの人材が十分ではないと言われているので、皆さま方には、成績優秀者としての力を発揮していただければと思います。ぜひ、後進の方々の模範となっただけのように、今後のご活躍を期待しております」

表彰式後には記念祝賀会も催され、全国から集まった受賞者たちがお互いの努力をたたえ、同じ目標に向けて挑戦していく仲間として交流を深めていた。

平成27年度優秀団体  
「ブリティッシュ・カウンシル駐日代表賞」受賞

## 福島県双葉町立双葉中学校

松本 涼一先生



## 英語を通じて自己肯定感を高め

## 双葉町や夢について英語で発信できる力を

双葉町では東日本大震災の原発事故により避難区域とされ、町民は全国に避難しました。今、双葉町では、町の将来を担う人材育成に努めています。町を挙げて英語教育にも力を入れ、生徒全員が英検受験をできるように受験料を補助する制度なども整っています。

本校は震災後、一時休校し、3年前に校地を別の場所に移して再開しました。震災前200名いた生徒も平成27年度は10名となり、少人数で学校生活を送っています。英検には平成27年度から取り組み、第2回検定で9名が受験。準2級から4級まで、生徒が自分の英語力に合わせて受験して合格しました。第3回検定では、皆1つ上の級に挑戦しています。

受験に際して、特に対策を取ってはならず、

日々の授業冒頭の帯活動で行っているQ&Aやチャット、スピーチなどの活動によって、生徒たちは英語力を高め、それが結果的に英検合格にもつながったのだと思います。英検は全国的な指標であり、自分の英語力を客観的に測ることのできる試験として、中学生には身近な試験です。

英語力が高まり、英検にも合格できたということで、生徒たちには自信を持ってもらいたいですし、それが自己肯定感を高めることにつながればいいですね。被災地の学校として、これまで国内外の多くの方々からのご支援をいただきましたが、今後は、生徒たちにもそうした方々への恩返しとして、被災地の現状や自分の夢、双葉町の魅力を英語で発信していくことを目指しています。

平成27年度優秀団体  
「カナダ大使賞」受賞

## 千葉県立船橋法典高等学校

矢野 玲子先生



## 英検受験を通して、

## 生徒が英語嫌いから英語好きに

中学段階で学びへの自信をなくした生徒が多く入学してくる本校では、英語嫌いの生徒が9割程度を占め、アルファベットの復習から授業を始めます。そんな生徒たちに自信を付けてほしいと、英検に取り組んできました。

3年前は希望者を募り、放課後に受験させましたが、全校生徒750名のうち、受験者数は12名。英検3級に合格すれば、卒業時の単位を1単位、準2級では2単位増やす制度があるにも関わらず、部活動に参加する生徒が多く、10名程度を集めるのがやっとでした。そこで、2年前には3年生の選択科目で英検に取り組み、履修した26名の生徒が全員で、中間テストの代わりに英検を受験しました。

そして、平成27年度は、全校受験へシフト。第1回検定での3級合格を目指し、英語の授業内で、英検の問題を使って指導することに

しました。初めは英語への拒絶反応もありましたが、英検の出題傾向を知ると、やる気を出し、英検の問題を繰り返し解くうちに、高い点数を取れるようになっていったのです。そうして、3年生18人、2年生15人、1年生15人が3級に合格。生徒たちには英語に対する自信が芽生え、学習意欲が高まっています。なかには、準2級に挑戦する生徒も現れ、第3回検定に向けて努力し、合格することができました。「大学で英語を学びたい、英語では誰にも負けたくない」とまで言うようになり、英検に取り組んできたことの成果を実感しています。

高校生活を通じて何か1つでも得意なことがあれば、生徒は自信を持つことができ、目標に向けてまっすぐ進んでいくことができます。英語を通じて生徒に自信を付け、伸ばしていきたいと、日々、指導にあたっています。

|                    | 個人の部                                                                                                                                                  | 団体の部                                                             |
|--------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------|
| 生涯学習奨励賞            | 年間を通し、英検CSEスコアが最も高かった60歳以上の方                                                                                                                          |                                                                  |
| 米国大使賞              | 英検CSEスコアが最も高かった大学生・短期大学生                                                                                                                              | 英検の受験率（受験者数÷在校生徒数）が最も高かった団体                                      |
| ブリティッシュ・カウンシル駐日代表賞 | 英検CSEスコアが最も高かった高校生                                                                                                                                    | 英検の取得率（英検取得者数÷在校生徒数）が最も高かった団体                                    |
| カナダ大使賞             | 英検CSEスコアが最も高かった中学生・小学生                                                                                                                                | 英検の受験率伸長差（今年度受験率－前年度受験率）が最も高かった団体                                |
| オーストラリア大使賞         | 英検CSEスコアが最も高かった教員                                                                                                                                     | 英検の受験者数が最も多かった団体                                                 |
| 日本商工会議所会頭賞         | 英検CSEスコアが最も高かった社会人                                                                                                                                    |                                                                  |
| 日本英語検定協会賞          | 【奨励賞】過去10年間で1級を3回以上合格し、平成27年度の英検CSEスコアが上位3名<br>【特別賞】過去10年間で5級から1級までの全ての級に合格し、平成27年度の英検CSEスコアが上位3名<br>【4級満点賞】4級の試験で満点を取った方全員<br>【5級満点賞】5級の試験で満点を取った方全員 | 先進的な取り組みをし、日本の英語教育の向上に多大な貢献をした団体<br>【高等学校の部】<br>【大学の部】<br>【企業の部】 |
| 文部科学大臣賞            | 米国大使賞、ブリティッシュ・カウンシル駐日代表賞、カナダ大使賞、オーストラリア大使賞、日本商工会議所会頭賞の受賞者の中から、最も英検CSEスコアが高かった方                                                                        | 英検の合格者数が最も多かった団体                                                 |





## 帰国後の取り組み報告

## REPORT

## 中学校英語教員研修

## 生徒が意欲的に学習に取り組もうとする姿勢を アクティブ・ラーニングで育む

米国  
モンタナ州立大学

京都府 京都市立加茂川中学校（研修当時：京都市立修学院中学校） 教諭 並木 亮子

## 課題

梓にはまった対話が多い授業だった

私が日々の授業を進めるなかで意識していたことは、1時間の授業での生徒の英語の使用量でした。ペアワークやグループワークなどを通して、できるだけ英語でのやり取りを増やすことを心掛けていました。しかし、従来の私の授業では、教科書本文の重要表現を確認後“Would you like \_\_\_\_?”, “Yes, please.” “May I have \_\_\_\_\_?” “Here you are.”というように、空欄に単語を埋めながら会話するというような枠にはまった対話が多く、広がりのなさにもどかしさを感じていました。

## 帰国後の 変化

## 「広がりのあるタスク活動」で生徒を巻き込む

モンタナ研修では、英語教授法について幅広く学ぶなかでも「アクティブ・ラーニング」を中心に、1時間の授業でいかに生徒の活動時間を多く設けるか、どうすれば同時に全ての生徒をアクティブに活動させることができるかについて学びました。実際に学習者として、アクティブ・ラーニングについて授業を受け、「いつの間にか、与えられたタスクにのめりこんでいた」という感覚を持ちました。授業で、生徒たちにその感覚を持たせるためには、以下の3点が不可欠であると考えます。

- ①「活動にある程度 of 自由 (広がり) があること」
- ②「言語の使用場面が明確であること」
- ③「Authentic なものであること」



“Involve”

大切なことは、これらを網羅した「タスク活動」を生徒に与え、生徒を活動に「Involve」する（巻き込む）ことです。研修後の授業では、対話をする場面で対話文やモデル文は一切設けませんでした。例えば、食事の場面を指導する際には「ホームステイ」という使用場面を設定し、4人組でグループを作り2人ずつ「ホスト」「ゲスト」に分かれ、ホスト側、ゲスト側になった際に使いたい表現などを考えさせます。実際の会話を想定させることで、生徒たちは相手が何を言ってくるか想像力を働かせます。教科書には、食事での対話表現しか載っていませんが、「自己紹介も必要だな」「トイレに行きたくなったときの表現も必要だ」など、教科書の枠を超えて、言いたいことがどんどん出てきました。

実際にこの授業では約5分間ずつ、ホスト、ゲストの役を入れ替えて対話させ、実際に食べ物や飲み物のイラストカードを渡し合いながら活動をさせました。相手から何が返ってくるのか分からないのが会話の面白さです。生徒の感想からは、実際の会話を想定したからこそ得られた課題、学習意欲が見られました。英語を使える日本人を育成するためには、こうした広がりのあるタスク活動を続け、英語を教科書という枠から一度取り外し、コミュニケーションツールとして英語を使う意識付けをすることが大切であると感じています。



## 今後の展望

## 教科書指導、文法指導と結びつけたアクティブ・ラーニングに

アクティブ・ラーニングのメリットは、「生徒主体で生徒が自ら学習に向かおうとする姿勢を養える」という点が挙げられますが、一方で、その活動のために生徒が準備をする時間、生徒が活動する時間を確保しなければならないという「時間の壁」が常につきまといます。それを解決するためには教科書指導、文法指導とアクティブ・ラーニングを結び付けた指導、もしくはそれらとは切り離して、短時間でも生徒主導で進めることができるタスク活動が必要であると感じています。

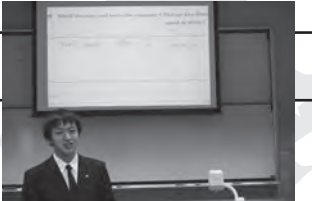
## REPORT

高等学校英語教員研修

## 技能統合型の言語活動を取り入れた コミュニケーション型授業づくりを

英国  
ケンブリッジ大学

宮城県泉高等学校 教諭 渡邊 崇



## 課題

## 授業の手法とその効果に対する客観的評価への不安

教員になって5年目に進学校に転勤しました。しかし、そこでの経験から、受験指導（知識偏重）に疑問を持ち始め、自分なりにコミュニケーションな授業（技能を身に付けさせる授業）に取り組んできました。それはまず「音読活動」であり、意味のやり取りを中心とする「ペアワーク」等でした。生徒たちが生き生きと活動する一方で、漠然とした不安も抱いていました。それは、私の授業の手法とその効果に対するTEFL (Teaching English as a Foreign Language) の観点からの客観的評価でした。

## 帰国後の 変化

## より一層コミュニケーション型な授業を実践

研修での最大の収穫は、これまでの自分の授業に対するTEFLの観点からの理論的裏付けと客観的指標が得られたことです。より一層コミュニケーション型授業を実践しようという意欲が湧きました。以下に、現在担当している「コミュニケーション英語Ⅰ」(三省堂『CROWN』)での取り組みを記します。

**【Pre-reading】**

新課全体の導入として、Dictoglossを行います。イントロの40語程度の英文を使います。リスニングの際に、研修で紹介されたAudacityというフリーソフトを利用します。容易に音声速度の調整ができ便利です。生徒はペアになり、ゲーム感覚で英文を復元していきます（認知理解の促進）。次に、課全体のSemantic (Concept) Map作りをします。生徒個人がKey Wordsを集め、Flowchartを作ります。図や絵を含めると、さらに視覚的効果があります（Infographicsの手法）。また作成したMapは読後活動時に、振り返り材料としても使います。最後に、題材によってはYouTubeの動画を見せます。ここまで行くとScaffolding（足場固め）は十分だと思います。

**【While-reading】**

Q&Aの際に、あえて正解のない質問（Open-end）を用いたり、曖昧な記述への批判的質問を考えさせます（Debateの手法）。その結果、生徒たちの内容理解がより深まる感じがします。その後、音読で良質かつ十分なインプットを行います。生徒たちが、徐々に文字から離れることを目指します。音読はさまざまな方法で、楽しみながら行うことを心掛けます。

**【Post-reading】**

学年全体の取り組みとして、Sectionごとに要約を行っています。Key Wordsを各自が拾い、ペアでStory Retellingを何度か行い、最後に書かせます。SpeakingをしてからWritingを行う理由は、その過程で生徒の気づきが起きやすくなるためです（認知プロセスの活性化）。またImpromptuな力を付けるために、まず話すことから始める意識付けをしています。今後、自分の意見や感想を付け加える（Plus One Summary）を取り入れようと考えています。

## 今後の展望

扱う題材の内容や難易度を吟味した授業づくりを

コミュニケーション活動を展開していくうえで、生徒にとってその題材が意味のある内容か、適切な難易度であるかなどをより吟味しなければと思います。それが授業の成否を決めると思います。また語学学習である以上、授業のみでは不十分で、生徒が日々英語に触れる授業外の仕掛けや家庭学習の工夫が必要だと思います。

そして、個人的には多くの生徒たちが挑む大学入試が、一日も早く全て「4技能型」になることを希望しています。それが我々英語教師の日々の授業に臨む活力になります。



Cover Photo:

岐阜県 多治見市立笠原小学校 教諭 勝部 佳純  
山口県 山口市立大蔵小学校 教諭 中沢 純子  
宮城県 石巻高等学校 教諭 武田 誠

## 編集後記

今号では「言語活動の充実とアクティブ・ラーニング」をテーマに特集を組みました。学習の3要素の1つである「思考力・判断力・表現力等」を育むためには、今後ますます生徒主体の言語活動を充実させ、知識・技能を活用しながら課題解決する力を付けることが大切だとされています。その1つの学習形態が、「アクティブ・ラーニング」です。そこで、全国の小・中・高から、日々の授業で、ペアワークやグループワークなどを通して、言語活動を充実させ、生徒が「学びを深めて」いる学校の取り組みも併せてご紹介しました。どの学校でも、児童生徒たちは、生き生きと言語活動に取り組み、自分の考えを臆することなく発表し、仲間と助け合いながら、学んでいる姿が印象的でした。今後の授業づくりのご参考にしていただくことができれば幸いです。

『英語情報』編集部一同

## 英語情報 2016 夏号

2016 年 7 月 1 日発行

発行 公益財団法人 日本英語検定協会  
企画広報部 広報課  
〒162-8055  
東京都新宿区横寺町 55編集統括 株式会社モアカラー  
アートディレクション・制作 株式会社モアカラー

印刷 日新印刷株式会社

製本 有限会社穴口製本所

©無断転載、複製を禁じます。

©2016 公益財団法人 日本英語検定協会

## 英検試験問題と解答のウェブサイト公開のご案内

公益財団法人 日本英語検定協会は、より広範な情報公開と、サービスの質的向上を図るべく、一次試験問題を英検ウェブサイトにて公開するサービスを行っております。**一次試験日から約1週間後に問題を提供いたします。**英検ウェブサイトの URL は、下記の通りです。

**英検試験問題** <http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/>

一次試験の「解答速報」は、毎回一次試験日の翌月曜日13時以降に英検ウェブサイトにて公開いたします。

**英検解答速報** <http://www.eiken.or.jp/eiken/result/>

## 本誌について

**お問い合わせ先 英検サービスセンター** TEL 03-3266-8311

本誌は以下、英検ウェブサイトよりPDFにてダウンロードしていただくことが可能です。

<http://www.eiken.or.jp/eiken/group>

## お問い合わせ電話案内

電話番号はお間違えのないようお願いいたします。

● 英検申込受付に関すること  
(出願、検定料など) **英検サービスセンター** (個人) **03-3266-8311**  
(団体) **03-3266-6581**

● 英検 Jr. に関すること **英検サービスセンター** (英検 Jr.) **03-3266-6463**● 研究助成に関すること **英語教育研究センター** **03-3266-6706**● BULATS に関すること **BULATS 事務局** **03-3266-6366**● IELTS に関すること **IELTS 事務局** **03-3266-6852**● TEAP に関すること **TEAP 運営事務局** **03-3266-6556**● 英検留学に関すること **英検留学情報センター** **03-3266-6839**● 通信講座に関すること **通信教育課** **03-3266-6521**● その他のお問い合わせ **英検サービスセンター** **03-3266-8311**

※ 全国の英語教育に関する研究会、セミナーなどのウェブへの情報掲載については、英検のウェブサイトのフォームより申し込みください。

## 2016年度 実用英語技能検定 試験日程

| 第1回検定                                                                           | 第2回検定                                                                          | 第3回検定                                                                                 |
|---------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>申込受付</b><br><b>3/18(金)~5/20(金)</b><br>【書店締切: 5/18(水)】                        | <b>申込受付</b><br><b>8/1(月)~9/16(金)</b><br>【書店締切: 9/14(水)】                        | <b>申込受付</b><br><b>11/29(火)~12/20(火)</b><br>【書店締切: 12/16(金)】                           |
| <b>一次試験</b> (筆記・リスニング)<br><b>6/12日</b><br><b>準会場</b> 6/11日・12日<br>中学・高校のみ 6/10日 | <b>一次試験</b> (筆記・リスニング)<br><b>10/9日</b><br><b>準会場</b> 10/8日・9日<br>中学・高校のみ 10/7日 | <b>一次試験</b> (筆記・リスニング)<br><b>2017/ 1/22日</b><br><b>準会場</b> 1/21日・22日<br>中学・高校のみ 1/20日 |
| <b>二次試験</b> (面接形式のスピーキング)<br><b>7/10日</b>                                       | <b>二次試験</b> (面接形式のスピーキング)<br><b>11/6日</b>                                      | <b>二次試験</b> (面接形式のスピーキング)<br><b>2017/ 2/19日</b>                                       |

※ 4級・5級のスピーキングテストの受験日は申し込んだ回次の二次試験の日から原則1年間です。詳しくは英検ウェブサイト内4級・5級スピーキングテスト特設サイトをご覧ください。

TEAP利用で、  
入試が変わるTEAPを受験して  
合格に近づこう!高校2年生  
以上対象受験のチャンスは  
年3回  
(7月、9月、11月)複数学科に  
出願可能※出願基準点等の条件は  
各大学にお問い合わせ  
ください。

TEAPを利用した入試とは、各大学が実施する英語の試験ではなく、事前にこのアカデミック英語能力判定試験 (TEAP) を受験し、各大学で設定しているTEAPの出願基準点をクリアしていれば、本番では英語の試験は受けなくてもよいというものです。

「大学教育レベルにふさわしい英語力」を  
正確に測定する英語能力判定試験

**TEAP**  
Test of English for Academic Purposes



## 2016年度 試験日程・申込期間

| 第1回                                                 | 第2回                                                | 第3回                                                   |
|-----------------------------------------------------|----------------------------------------------------|-------------------------------------------------------|
| <b>7月24日</b> 実施<br><b>受付終了</b><br>5月16日(月)~6月30日(木) | <b>9月25日</b> 実施<br>申込期間<br><b>7月19日(火)~9月1日(木)</b> | <b>11月20日</b> 実施<br>申込期間<br><b>9月12日(月)~10月27日(木)</b> |

※コンビニ・郵便局ATM支払の場合は、上記より約2週間前に申込締切りとなります。ご注意ください。詳しくはTEAPウェブサイトへ。

お問い合わせ

公益財団法人 日本英語検定協会 英検サービスセンター TEAP運営事務局  
TEL. 03-3266-6556 ※平日9:30~17:00 (土・日・祝日を除く)

詳細・サンプル問題はこちらから

<http://www.eiken.or.jp/teap/>



